増殖（美子の場合）

本名・筆名　前川美和
年齢・職業　五十八歳　主婦
略歴　1978　大阪女子大学学芸学部卒業
2003　関西学院大学大学院
言語コミュニケーション学科修了
1978~1981　奥本製粉株式会社
1988~1994　中学・高校の非常勤講師
1995~2013　日本語教師

四百字詰原稿用紙百五十三枚

一、美子と耕介

美子と耕介は二人が大学四回生の六月、生物の教育実習をした和歌山の高校で出会った。生物科には先生が二人と講師が一人いた。他の科目の実習生は一週間目、先生の授業を見学するだけで、実際に教えるのは二、三回だと言っていたが、生物科に関してはずいぶん事情が違った。二人の先生の授業を一回ずつ見せてもらった後、次からすぐに教壇に立つように言われた。授業を任された美子と耕介は、自分なりに教案を作成し、お互いにチェックし合い、授業に臨んだ。授業時間が重ならないときは、相手の授業を見に行って、気がついた点を指摘しあった。

美子は一年生を対象に減数分裂のところを担当した。教室に入ると、まだ子ども子どもした生徒たちが好奇心いっぱいの目を向けてきた。美子はまず既習の細胞について確認しておこうと考えた。生徒に質問する。

「細胞の中には何がある？」

「えーっと、核とミトコンドリアとゴルジ体と・・・」

「そうね。小胞体もあるよ。核の中に染色体があって、そこにＤＮＡがある。ＤＮＡって何？」

「二重らせんの遺伝子情報がいっぱい詰まってるものかな？」

「そう、そう。それが生き物の特性を決めるのよね」

ここで、美子は黒板に大きく人間の形を書いて、頭のてっぺんの細胞と指先の細胞、足の細胞など、どの部分の細胞を取っても同じ遺伝子情報が入っていることの不思議さを強調した。一般細胞は全

く同じ量と形を持つＤＮＡを複製し増殖するのに対して、生殖に関する細胞だけは父方と母方から情報を半分ずつもらうため、減数分裂することを理解させるのに、発泡スチロールの染色体模型を用いて説明した。生徒たちは熱心に耳を傾けていたが、やや一方的なレクチャーになってしまったせいか、こちらに顔を向けながら、コックリコックリする生徒もいた。美子自身、高校生の頃、生物の時間に、先生の奏でるアカパンカビの話を子守唄代わりに居眠りした記憶がよみがえってきた。生徒のかわいい寝顔を見ながら、つまらない授業をしてしまった自分の力不足が情けなかった。

美子が耕介の授業を見学させてもらったとき、彼は三年生を相手に、ニホンザルの生態について、おもしろい授業を繰り広げていた。黒板にニホンザルの社会構造を円で大雑把に描き、説明する。

「ニホンザルの群れはメスだけの血縁集団なんだ。母と娘の親しい関係はずっと続く。つまり、娘たちは自分の生まれた群れを出ることはないんだよ」

「先生、オスは？　オスも生まれるだろ？」

「もちろんオスの赤ちゃんも生まれるよ。どうなると思う？」

「追い出されるんかな？」

「どうして？」

「男が一人前になるってことは、一匹オオカミ・・・じゃなくて、一匹サルになるってことでしょ？」

「そう、そう。それに、群れの中にいる自分の姉妹と交尾することも避けられるよね」

生徒たちは納得しながらも

「でもね、先生。男って辛いよね、孤独だな」

男子生徒はサルのオスに同情している。

「サルのオスは一定の年齢になると、自立しろって追い出されるのに、人間の男には最近自立してないヤツ、多いよね」

耕介の言葉に、女子生徒たちはわが意を得たりと、勢いづいて言う。

「そう、マザコン男、多いよ」

「やっぱり生物学的に見ても、男は親から物理的にも精神的にも離れて立たないといけないのかもな」

耕介は締めくくる。

生徒と掛け合いながら進んでいく授業は自然で、しかも、的を得たものだった。美子は耕介の授業に感心すると同時に、自分の拙さを実感し、「教えること」に向いていない気がしてきて、自信を失ってしまった。教育実習の後、二人はハイキングに行ったり、初日の出を見に行ったりと、しばらくデートを重ねたが、進む道が分かれた四月以降になると、付き合いは自然消滅の道をたどった。

耕介は教師を目指し、教員採用試験に挑戦し続けた。一方、美子は教師をあきらめ、ゼミの教授のコネで泉南にある製粉会社の研究室に入れてもらい、品質管理の現場で、小麦と小麦粉の水分や灰分、タンパク質の含有量、さらに、小麦粉の生地の物性を調べる日々を送っていた。

そんなある日、美子は貝塚の本屋で耕介にバッタリ再会した。耕介は生物の講師をしながら、採用試験を受けているという。夏に西表島に行ってきた話を楽しそうにしゃべった。

「イリオモテヤマネコが見たかったんだけど、出会えなかったんだ。でも、マングローブの林が広がる光景はすばらしかったよ。それに、西表島の内陸は亜熱帯のジャングルだから、ヤドリギの類やツル植物がいっぱいあってすごいよ」

「何か珍しい生き物、見つけた？」

「道路をセマルハコガメが歩いてたんだ。天然記念物なんだけど、車道に出てきて、交通事故に遭うこともあるらしい。カンムリワシが電柱にとまってるのも見たよ」

「危険な動物もいるでしょ？」

「ハブはたくさんいるみたい。動物っていうんじゃないけど、カエルツボカビ菌はやっかいな菌なので、島に持ち込まれないよう、上原港には消毒マットが置いてあったよ」

「カエル・・・菌？」

「カエルツボ菌。カエルにくっつくカビで、病気を引き起こしてカエルを絶滅させることもあるらしい。カエルはイリオモテヤマネコのエサだから、そんなカビ菌が入ってきたら、島の生態系が変わってしまうよね。カビといっても、バカにできないよ」

美子は西表島について熱く語る昔と変わらない耕介の姿に懐かしさと安らぎを覚えた。二人はまた付き合い始め、耕介が採用試験に合格した次の年の春に結婚した。耕介は四月から新宮の高校勤務となったので、美子は仕事をやめて、付いていくことにした。

その高校は海の近くの学校で、柔らかな光に包まれたような環境にあった。一クラスが二十名程度で皆仲がよく、耕介も自然の中で水を得た魚のように、のびのびと教鞭をとった。二年後には長女春子、更に二年あけて長男夏生が生まれた。海辺で小さな生き物を相手に遊ぶことが多かったからか、二人とも海と小動物が大好きな子どもになっていた。耕介が和歌山市内の高校に移るまでの四年間は夫婦にとって、穏やかで幸せな時間だった。

市内に移ってきてからは時間の流れが速く、生活スペースも狭いので、美子は息苦しく感じることもあったが、人間は順応するもので、そんな空間にもいつしか慣れて、春子が地元の幼稚園に通うようになると、以前からずっとここで暮らしているような錯覚にとら

われることもあった。
耕介が市内の高校生の扱いに四苦八苦している一方で、美子は子どもを介して何人かのママ友なる存在もでき、天気の悪い日など子どもたちを互いの部屋で遊ばせながら、おやつ作りをしたり、育児の悩みや夫への不満をしゃべって、ストレスを発散させていた。また、子どもがお昼寝したときとか、夜早く寝付いたときは、子どもの服や小物をミシンで縫ったり、ベストやセーターを編んだりと専業主婦を楽しんでいたが、社会に繋がっていたい、生産的な活動に参加したいという欲求がムクムク膨らんできた。夏生が三歳になったとき、美子は耕介に言った。
「働きに出てもいいかな？」
「何、するの？」
「持ってる教免生かして、非常勤講師しようかと思うんだけど」
「非常勤っていったって、責任あるよ。授業に関しては正規の先生と同じだからね」
「うん、わかる。生徒から見れば、みんな先生だものね。でも、非常勤なら、放課後とか夏休みとか拘束されないでしょ？　春子は四月から二年生になるし、夏生も年少さんになるし、なんとかなると思うの」
「自分の中でもう決めてるんだろ？　やってごらん。ボクもできるだけ協力するよ」
「ありがとう」
教育実習で自分には教師への適性がないのではないかと、教師を諦めた美子だが、結婚し、二人の子どもを産んで育ててきたことで、子どもと向き合う自信が生まれてきたし、「教えること」への妙な気負いも感じずに取り組めそうだった。一月に講師登録をしてすぐに、高校の数学の時間講師の口が見つかった。理数系の教免を持っている人が案外少ないのかもしれない。それからは、数学の問題集や参考書を買ってきて、時間を見つけて勉強した。仕事をやめてから、使っていない脳は動き出すのになかなか時間がかかった。
共働きが軌道に乗るまではバタバタした。環境の変化によるストレスからか、夏生はよく熱を出した。定期テストの前などは休めないので、耕介やママ友に頼らざるを得ないこともあった。美子は自己満足のために、子どもたちや周りの人に迷惑をかけている現状を前にして悩んだ。耕介に半休を取ってもらうとき、申し訳なさでいっぱいになった。
「ごめんね。あなたの仕事に穴を開けるようなことさせて。わたし、何やってんだか。続けられるかしら」
すると、耕介が諭すように言った。
「前も言ったように、教師として働くってことは責任が生じるって

ことなんだよ。いろいろ大変さ。でも、逆に、いつでも休める仕事って気楽だけど自分が働く意味がないんじゃないか？　無理強いはしないけど、契約期間の一年間はしっかりやるべきだよ」

耕介の理解と励ましに支えられながら、美子は分かりやすく、変化のあるおもしろい授業を組み立てようと努力した。同学年のクラスを三つ担当すると、同じ項目を三回教えることになるので、一回目に教えてみてうまく行かなかったところを次回から修正することができた。実際に教えてみると、理解するのに時間がかかるだろうと思っていた概念が案外スッと入ったり、逆に、簡単だと踏んで、時間を取っていなかったところで皆つまずいたりと、生徒の反応は、美子の予想とは異なることが多かった。毎回ライヴをするようなスリリングな感覚で授業を楽しんでいた。

その学校には英語のアシスタントティーチャーとして迎えられたアメリカ人の先生がいた。席が近かったこともあって、片言の英語でやりとりしているうちに、友達になった。互いの家を行き来するようになり、交流が深まるにつれて、もっと相手の言うことを理解したい、もっと自分の言いたいことを正しく伝えたいという思いが強くなってきた。その思いがモチベーションになって、美子はもう一度英語を勉強し直そうと決意した。英検やＴＯＥＩＣの問題を解いていると、忘れていた単語や文法が古い記憶の底から蘇ってきた。ボキャブラリーが増えてくると、少しまともな英語が口から出るようになると同時に、相手の心の中がチラチラと見えるようになって、数学より英語のほうに興味が移っていった。それで、六年間続けた数学の非常勤講師をやめて、生き場所を塾に移し、英語を教え始めた。

二、美子の日常

大手の進学塾「ジーニアス」の駅前校に今日も活気のある講師の声が各教室から響いている。「ジーニアス」は和歌山を中心に大阪や奈良にもチェーン店を増やしている学習塾で、駅前校は有名私立高校への合格率が県下一の人気校だ。

塾の採用試験では、教える項目を与えられ、半時間ほどの間に教案を作り、他の応募者を生徒に見立てて、模擬授業をさせられて、合否と時給の査定がなされた。美子は時給三千円で雇われ、自分の授業が高く評価されたと喜んだが、すぐに営利目的の塾の厳しさを思い知らされることになる。

塾にはいくつかの決まり事があった。第一に、高い時給が支払われているのだから、授業の準備は家で終わらせ、塾の講師室で教科に関してすることは補充プリントなどのコピー程度にとどめること。

第二に、生徒に配布するプリントは商品のひとつとなるので、きちんとした形式できれいに作成し、無駄のないものにすること。第三に、授業用テキストはあるが、それを順にこなすのではなく、その内容を自分の中で消化した上で、効果的に生徒に提示すること。第四に、欠席者については、その時間に使用したプリント類はまとめておいて、次にどの講師が入っても渡せるようにする。また、授業の後で必ず電話を入れ、休んだ理由を聞き励まし、次回来やすい状況を作るフォローを怠ることのないようにすること。第五に、春講、夏講などの集中講習会では、新規に参加した生徒をレギュラー会員にするためのプッシュをこまめに行うこと。これらの決まり事を疎かにした場合、教務から厳しい叱責を受けることになる。

実際、大学生の男の子は授業の準備を講師室でやっていたのを見られ、ミーティングの際、教務一同から激しい非難を浴び、塾をやめざるを得なくなったし、三分の一ほど黒く印刷されたプリントを使おうとした新人の女の子は皆の前で厳重注意を受けた。美子自身も、春講中、新入会員への勧誘が甘いと、校責である溝口先生から小一時間ほどイヤミ混じりの叱責を見舞われた。塾ではいい授業を提供するだけでは不十分なのだ。しっかりとした営業活動が求められる。

また、生徒をやる気にさせるホームルームも重視され、なぜ今勉強しなければならないかを生徒に納得させるトークも不可欠となる。駅前校で数学を教えている大山先生は力説する。

「世のなかには『使う人間』と『使われる人間』がいる。自分の理想や野望をかなえるにはどちらの側に立たなければならないかは分かるだろう？　使う側になりたければ、何かを犠牲にしても、苦しくても、今勉強するしかないんだよ。この世の中を動かしているのは一握りのエリートなんだ」

多分各々の学校では優等生だと思われる真面目な生徒たちは、取り付かれたように耳を傾け、大山先生の言葉を心に刻み、エリートにならんがために、より一層勉強することになる。

美子は心の中で、何もかも犠牲にしてまでする価値のあるものなんてあるのかなと疑問に思う。クラブも恋愛も経験するなかで、いろいろ悩む時間も大切だし、適当に頑張って入れる高校に進んだほうが勉強も楽しいし、新しい目標も見えてくるんじゃないかと感じるが、超真面目な私学狙いの子には「適当に」という言葉は通じないのかもしれない。

ただ、このマインドコントロール的なエリート論は公立高校を志望する普通の子には効き目がないようだ。現に、美子は二人の子どもを近所にあるジーニアスのチェーン校に行かせているが、二人とも意欲的に勉学に取り組むというには程遠い姿勢で通っている。美

子が勉強へのモチベーションが上がっているかと
「塾、おもしろい？」と聞いても、
「普通。学校とあんまり変わらないよ」
などと、さらっとかわされてしまう。親として、普通に健全に育っていると喜ぶべきなのだろうが、悩ましいところではある。
一般的に塾といえば、名物講師が存在するものだが、美子の所属する駅前校にも一癖も二癖もありそうな講師が個性的な授業で生徒をひきつけている。
英語の橋爪先生は小柄な女の先生だが、生徒を睨み付けながら、迫力ある授業を展開する。少しでもボーッとしていようものなら、白いチョークが飛んでくる。受け取った生徒に向かって指示する。
「チョーク、二つに折ってみな」
生徒がびびりながら、
「はい」
と素直にチョークを折ると、
「その一つ、一つは何や？」
とたたみかける。
「チョ、チョークです」
恐る恐る答える生徒に、今度は白い紙を渡し命令する。
「ほな、この紙、二つに破ってみ」
生徒はためらいがちにビリビリと紙を破る。
「二枚になったけど、これ、何や？」
「紙です」
「そうや。どんだけ小さくなっても同じや。チョークはチョークやし、紙は紙や。こんなんのことを物質名詞っていうんや。分かったか？」
皆大きくうなずく。それを見て、満足げな橋爪先生。彼女は怖がられながら、崇拝されているのだ。
他にもユニークな先生がいる。数学の大山先生は学校の先生のことを事あるごとにコケにする。生徒の前で学校の先生を無能呼ばわりするのはどうかと思うが、公式を暗記させるのではなく数学的思考を伸ばそうとする彼の授業はおもしろかった。また、一見冴えない中年の菅原先生にはアメリカ人の奥さんがいて、ネイティブ並みの英語を話すそうだし、美人の英語講師の水原先生はフランス語にも堪能で、国連職員になることが決まっているらしい。
さらに、その講師陣の中にジーニアスに愛着を持っている人が多い。例えば、小学生部のいつも元気な西川先生は
「この塾の雰囲気が好きなんよ」
とジーニアスのファンであることを公言している。確かに、この塾には大阪大学や神戸大学をはじめとする有名所の大学生や大学院

生がたくさんバイトで入っていて、皆、生徒の心をつかみ、やる気にさせて、学力アップにつなげようとしのぎを削っているため、熱気と緊張感に包まれているのだ。この「教えること」を楽しむ雰囲気は一般の公立学校のよどんだそれとは全く違う。美子はこの塾で教えるためのスキルを叩き込まれた感がする。教員志望の学生は学校の教壇に立つ前に、塾という組織を経験すべきだと思う。大学を卒業して、すぐ閉鎖的な入れ物である学校に吸収され、治外法権が認められているようなクラスという名の密室の支配者になるよりも客観的に自分や生徒を捉えることができるかもしれない。

月一回、土曜日の午前中のミーティングでは、新人講師の模擬授業へのダメだしや叱咤激励、受験に関する新情報のシェアが行われる。その後、授業が始まる前に、親しい講師同士で昼ごはんを食べに行くことになるのだが、その場が授業の進め方や生徒の御し方などの相談や情報交換の場となっている。

美子はベテランの橋爪先生に中二の女子生徒にてこずっていることを打ち明けた。

「わたしの受け持ってる私立高校志望の今西さん、私の顔を見るたび、はき捨てるように『ムカツク』っていうのよ。授業中も友達の土井さんと二人でしゃべったり、授業妨害みたいなことをするし。橋爪先生のこと、尊敬してたのに、英語担当がわたしに替わって嫌みたい」

「あの子、沢井先生のこと、いろいろ言ってたわ。文句言いやねん」

「やっぱりね」

「自信持って、自分のやり方でやっていったらええんとちがう？じゃまやったら、真剣に怒ってやったほうがええで」

「橋爪先生の授業は迫力あってすごいと思うけど、わたしにはできないから。キャラちがうし」

「注目されたい甘えん坊なんよ。あの子のお母さんがまたちょっとすごいで。美人で派手で」

「今西さんは小学生のときからなにかと目立ってたよ。きれいだけど、きついからね。お互いなれるまで時間かかるかもね」

と西川先生。

「焦らず、マイペースでいくしかないですね。ただ、クラスに一人反発分子がいると、そのマイナスオーラが他の生徒たちをも蝕んでいきそうで怖い」

「塾に来る私立志望の子どもたちはしっかりした意志持ってるから、むやみに引きずられたりせえへんよ」

橋爪先生は続けた。

「校責が上野さんから溝口さんに替わったやろ？　溝口さんは一見ソフトで優しそうやけど、冷たくて厳しい人やで。冗談言って笑っ

てても眼鏡の奥の目はごっつい冷たいで」
それを聞いて、美子は納得しつつ言った。
「わたし、春講のとき、きつく怒られて、冷たくて容赦のない人だなって思ったわ」
「上野先生はすぐ怒ったけど、優しかったですもんね。みんなも上野先生の優しさ、よく分かってたし」
どうやら西川先生も上野派のようだ。
橋爪先生は新情報を披露する。
「上野さん、優しすぎたから、本部は駅前校にてこ入れするべく溝口さんを送り込んできたんや。やり手の証券マンやったらしいで。そういえば、教務主任の森さん、溝口さんとぶつかって、飛ばされたらしいで」
美子も西川先生も驚いた。
「えっ？　最近姿、見かけないと思ってたら、そんなことなってたんか。森先生、ときどき授業中に顔出して、生徒を和ませてくれてたのに」
「何があったのか分からんけど、意に沿わん社員は有無を言わせず、即飛ばす。教務の人ら、溝口さんのこと怖がってぴりぴりしてるわ。わたしらも気をつけやなあかんで」
塾においては校責のキャラクターがその校の雰囲気を左右するものだ。駅前校の強化を狙って抜擢されたという溝口という人物の撒き散らす毒が、健全で自由なエネルギーに満たされた空間にジワジワと拡散していく様が一瞬目に浮かんで、美子はぞっとした。

三、耕介の日常

耕介は公立高校で生物を教えている。生物という科目はマイナーな科目だ。理系の生徒はほとんど化学と物理を選択するから、生物は文系の生徒が共通テストのために仕方なく取る科目になってしまったきらいがある。生物教室はあるものの、たまねぎの薄皮や人の頬の内側の細胞を染色して顕微鏡で見たり、細胞分裂や発生のメカニズムを映像で見せるときぐらいしか活用できていないのが現状だ。授業中居眠りをする生徒も後を絶たない。人も生き物の一種なのに、生き物の構造や生態に関心を持つ子は少ないのだろうか、それとも、自分の教え方が間違っているのだろうかと、授業の終わった薬品臭い生物教室にポツンと一人いるときなど自問する日もある。
そんな耕介にとって、放課後の生物クラブの活動は精神安定剤のようなもので、とても楽しい。本当に生き物が好きな生徒が集まっている。今は三年が二人、二年が四人、一年が三人いて、オタクっぽいオーラを漂わせながら、仲良く活動している。週二日、生物教

室を基点として、機会があれば、フィールドワークに出て行くようにしている。
春、風が暖かくなった頃、近くの川の水を採取してきて、顕微鏡をのぞき、スケッチする。ミドリムシ、ボルボックス、運がよければ、ミジンコやゾウリムシが見られる。絵の上手な子が鮮やかに小動物を描き出すのを見て、耕介は思わずつぶやいた。
「南方熊楠みたいだな」
「ミナカタクマグスってだれですか？」
「和歌山の生んだ天才だよ。小学生のときから図鑑を書き写しはじめて、五年がかりで百科事典、百五冊、図入りで描いたんだ」
「すごい！」
「アメリカとイギリスへ出かけていって、博物館で標本整理を手伝ったりしたそうだ。何ヶ国語も話せるみたいだよ。帰国してから和歌山の田辺に住んで、粘菌の研究をしたんだ」
「先生、ネンキンって何ですか？」
「粘る菌って書くんだ。キノコやカビの仲間の菌類だけど、アメーバみたいに細胞が這い出してきて動き回るんだよ。不思議な生き物だ」
「へえ、見てみたいな」
「山の湿った木に柿色の粘菌が網状に広がってることがあるけどね。粘菌は成長すると、アメーバ状から小型のキノコ状に変身するから、変形菌とも呼ばれるんだ」
「へえ、虫じゃないのに変身するんだ」
「白浜に南方熊楠記念館があるよ。アドベンチャーワールドに行く機会があったら、寄ってみたらいいよ」
「うん、そうする！」
生徒たちは口をそろえて言った。生徒が和歌山の偉人に興味を持ってくれて、耕介はうれしかった。
ある日、何気なく美子とテレビを見ていると、植物写真家の埴沙萌氏が撮ったキノコの胞子の映像が流れてきた。胞子が風に乗って、一面に飛ぶ様は美しく幻想的だった。暗い中に浮かび上がったキノコの傘からキラキラと光る粒子が次から次に放出されていた。この感動を生徒たちにもぜひ味わわせてやりたいと思った。
耕介は大学のゼミ仲間の一人で、現在大学の生物研究室で講師をしている里村透にも声をかけて、秋に、生石高原ハイキング計画を立てた。山歩きをしながら、キノコを見つけ、生物教室に戻って観察しようと思ったのだ。里村に電話すると
「オレ、忙しいんだよ。なんでガキどもとハイキングなんか行かなきゃ行けないんだよ」
「おまえ、この前科学好きの子どもたちを育てていかなくちゃって

言ってただろ？　キノコのこととか教えてやってくれよ。生物講師のかわいい洋子ちゃんも一緒だよ」
「かわいい洋子ちゃん？　そっか、子どもたちのために一肌脱ぐか」
「ありがとう」
ハイキングの日、耕介と里村と洋子、それから、生物部の生徒七人が学校に集合した。眼鏡をかけた中肉中背の浅黒い耕介とは対照的に、ひょろっと背が高く、色白の里村は寝起きのまま来ましたという格好だ。寝癖のついたボサボサ頭で、パジャマかと思うようなTシャツとジャージを身につけていた。
「洋子ちゃんも来るって言っただろ？」
耕介が小声で言うと、
「うん。だから、染みのないシャツを引っ張り出して着てきたんじゃないか」
「はい？」
耕介は里村をみんなに紹介する。
「里村先生はO大学で生物を教えているんだよ」
皆は目を丸くして、大きな声で言った。
「へえ、かっこいい」
「何を研究なさっているんですか」
洋子が尋ねると、
「菌類。主にカビですね」
すると、生徒は一斉に
「えーッ？　カビ？　いやだ」と引く。
里村は心外とばかりに言う。
「カビもいろいろだぞ。酒造るカビだってあるし」
「あっ、そうか。漫画で見たことある。でも、カビって聞くと、弁当箱洗わないで放っておいて、一週間くらい経ってから開けたら、黒いモジャモジャしたカビが生えてたのを思い出しちゃったから」
一年生の男の子がカビにまつわる思い出を披露したところ、
「うわっ！　不潔！」と女子全員から総スカンをくらった。
ワイワイ言いつつ、耕介と里村の二台の車に分乗して生石高原に向かった。
十月の生石高原は頂上付近はススキが群生していて、そこに至るまでには、イタドリの白い花や実、ミズヒキの小さい赤い花などが見られ、秋の気配がする。耕介がよく熟したアケビの実を取って、生徒に見せると、覗き込みながら聞く。
「先生、何？　なんかの幼虫？」
「アケビって言って、甘いよ」
耕介が皆に差し出すと
「ウヘッ、そんなん食べるの？」

気味悪そうに後ずさりした。耕介が中身をツルリと口に入れると、
「ウワッ、食べちゃった」
洋子先生まで恐ろしいものでも見るように耕介を眺めている。耕介は久し振りに出会った甘さにノスタルジーに浸る。立ち尽くす子どもたちを尻目に、里村もあちらこちらでアケビを見つけ、モグモグやっている。今の子どもたちは、アケビはもちろん、自生しているイチジクやビワやヤマモモを食べる物とは思っていないようだ。耕介は、小学生のとき学校からの帰り道、みんなでヤマモモを取り合って口を真っ赤にして食べたことを思い出して、一人ほほえんだ。
お目当てのキノコは、普段何気なく山歩きをしているときはよく見かけるのだが、探しているとなかなか見つからない。しかし、木々が重なり合って陰になった山道を歩くのは気持ちがいいものだ。木や草たちが息づいている匂いが濃密に漂っている。里村は皆に声をかける。
「足元や大きな木の根元を注意してみてくれ」
「先生、ここにシメジみたいなのがあるよ」
里村は本領を発揮して教える。
「イタヤカエデの根元に生えてるね。これはみんなのよく知ってるブナシメジだよ。こっちの白いキノコに触ってごらん」
「ウワッ、ネチネチしているよ。気持ち悪い！」
「これはヌメリツバタケといって食べられるキノコだと思う。でも、キノコって毒をもってるのも多いから口にいれないほうがいいよ」
と注意する。
「先生、この薄茶色でいっぱいくっついてるのはたべられるの？」
生徒がまた新しいのを見つけた。
「これは多分センボンイチガサで食べられるんじゃないかな。でも、これ、コレラタケという毒キノコとよく似てるから、やっぱり食べないほうがいいよ」
里村先生は忙しい。洋子も珍しいキノコを見つけた。
「里村先生、ここに傘のない小さいのが生えてますよ」
「よく見つけましたね。これは比較的よくあるキノコなんだけど、小さくて見過ごされてしまいがちなんです。ズキンタケというんですが、このキノコは傘がないから体全体から胞子を出すんですよ」
「よくご存知ですね」
洋子の尊敬の眼差しに、単純な里村は得意満面。
「それほどじゃないですよ。オレの知ってるのはほんの一握り。キノコの種類は数えられないくらいありますから」
「キノコといえば、スーパーで売ってるエノキダケ、シメジ、マイタケくらいしか知らなかったけど、奥が深いんですね」
「そうなんです。キノコに魅せられる人は結構いますよ」

洋子の言葉に里村はうれしそうだ。

いろいろなキノコが採取できたので、学校に戻り、観察の準備をした。キノコを竹串にさして固定し、部屋を暗くして、ライトをキノコに当てて、目を凝らした。しばらくすると、生徒たちが騒ぎ出した。

「ウワッ！　ミルキーウェイみたいに胞子が流れているよ」

「傘から流れだしてる。ひっきりなしに飛び出してきて、空中で遊んでるみたい」

「きれいだね」

全員夢中でキノコの胞子の飛ぶ様子を眺めていた。耕介が情報を付け加える。

「埴さんという人はお店で買ってきたシイタケの胞子が飛ぶのも撮ってたよ。みんなも試してみたらどう？」

「おもしろそう、やる、やる」

皆がキノコの胞子の美しさに感動しているとき、里村が言った。

「胞子を飛ばすのはキノコだけじゃないよ。カビも空気中にたくさんの胞子を飛ばすんだ。で、それらが出す揮発性の化学物質が人体に悪影響を及ぼすことが分かってきてるんだ」

「カビって、僕たちの周りにたくさんいるんですか」

「そうだよ。チーズ作りなどの発酵を促すような人の食生活と密接な関わりのあるいいカビもあるけど、今問題になっている悪いカビも一般家庭の広い範囲にいるんだ。代表的なものは三つ。まず家の居間などの生活空間にいるアスペルギルス。それから、冷蔵庫などの冷暗所にいるペニシリウム。そして、風呂場などの水周りに生える黒カビと呼ばれるクラドスポリウム。聞いたことはないだろうけどね」

「テレビで、風呂場のカビとかエアコンから吹き出してくるカビのこと見たことあるよ。先生、カビと細菌は違うんですか」

「微生物というくくりでは、ウィルスや細菌と同じ仲間だけど、カビは、キノコや酵母、粘菌といっしょに菌類に入れられる。細菌とカビでは細胞の大きさや構造が違うんだ。細菌には核がないし、とても小さいんだよ」

耕介が補足する。

「昔の家屋は木造建築で冬はすきま風が入ってきて寒かったけど、湿気や熱気はうまく逃がしていたんじゃないかな。今の家は密閉型で空調が備わってるけど、湿気がこもりやすいから、カビが生える。エアコンにカビが生えたら、部屋中にカビの胞子が撒き散らされることになるんだ」

里村が続ける。

「そう。だから、呼吸器を通して、いろんなカビの胞子が体内に入ってくる。それらがどんな悪さをするのか分かっていない部分が多いんだよ。カビは自分にとって劣悪な環境になると、菌糸を伸ばすのをストップして、胞子を作って飛ばして生き残ろうとするようだ」

耕介は社会学に発展させる。

「人も極限状態に追詰められると、本能的に己のＤＮＡを残そうとして虚しい行為に走ると聞いたことがあるよ。つまり、絶望のなかでセックスに没入する。生き物っておもしろいね」

「先生、ちょっと過激ですよ」

と洋子先生が突っ込む。里村は生徒の顔を見回して

「オレはどこにでもいるカビについて、いろいろ研究してるんだ。みんなも少し興味持ってくれたかな？」

と聞くと、生徒は大きくうなずいた。

四、美子の変調

夏休みの日曜日、春子は高校のテニスクラブ、夏生は塾に出かけ、美子と耕介は二人だけの昼ごはん。暑くてやる気の出ない美子は耕介に尋ねる。

「子どもたちもいないし、きのうの残りものの鮭でお茶漬けにしてもいい？」

「うん、いいね。日本人はお茶漬けでしょ？」

二人でお茶漬けをサラサラ食べていたとき、美子は激しくむせた。米粒でも気管に入ったのか咳がたてつづけに出て、息ができない。助けを求めて、耕介のほうを向いても、テレビを見ている耕介には美子の切迫した状況がつかめていない。美子は何も言えないまま、もうだめかもしれないなと思った瞬間、急にスーッと楽になった。

「死ぬかと思ったわ」

息を吹き返した美子がつぶやいた。

「どうしたの？」

とキョトンとした顔で聞く耕介を恨みがましい目で見ながら、

「何も知らないでしょ？　テレビばっかり見てて」

「えっ？」

「ごはん粒が気管に入ったみたいで、呼吸できなかったのよ。しゃべれないから、目でＳＯＳ出してたのに」

「気、つかなかった。ゴメン、ゴメン」

「手の届くところに耕介がいても、一人で死んでいくんだなって思ったわ。死ぬって孤独で、しかも、意外と簡単みたいな」

「変なこと、言うなよ」

その日はそれで終わったのだが、あくる日になって右の胸が痛ん

だ。息をするたびに、今まで経験したことのないような鈍痛を感じた。横になると楽になるような気がして、しばらくソファーに寝ていたが、そのうちに高熱が出てきた。

次の日、かかりつけの前島病院に行って、レントゲンを撮った。前島先生はそのレントゲン写真を映し出しながら

「右の肺が白くなっていますから、肺炎だと思いますね。それとは別に肺に何かカゲがあるのが気になります。紹介状を書きますから、今から日赤に行ってください。まだ受け付けに間に合うでしょう」

紹介状を持って、タクシーを飛ばした。受付終了時間ギリギリに入り、長時間待たされて、見てもらったところ、やはり肺炎になっていた。入院を勧められたが、子どもたちのことや仕事のことを考えると、入院は避けたかったので、抗生物質をもらって帰り、様子を見ることにした。幸い高熱は三日ほどで下がり、ホッとしたのだが、肺のＣＴを見ながら、日赤の杉本先生は聞いた。

「右の肺に穴が開いていますね。今回の肺炎で開いたのか、もともとあったのか、前に撮ったレントゲンかＣＴがあれば分かるのですが、ありますか」

美子は、耕介の健康組合から毎年送られてくる無料健診の案内をいつも無視していた事をチラッと思い浮かべ、答えた。

「肺のＣＴは撮ったことがないし、レントゲンは撮ったことはあると思うんですが、ずっと前なので」

「そうですか。この肺の穴を放っておいて、ある種の菌が入り込むと、厄介なことになるので、手術で取ったほうがいいんですが」

「えっ？　肺の穴を取る手術ですか」

「そうです。どうですか」

美子は手術と聞いて動揺した。体にメスを入れることはしたくなかったし、入院によって日常生活に生じる様々な支障を想像すると、今手術をするのは避けたかった。

「先生、手術は絶対にしないとだめですか」

「絶対というわけではありません。自然に穴が塞がることもありますから。少し様子を見ますか」

「はい」

美子は胸をなでおろした。

当分の間、毎月ＣＴと血液検査をして、穴をチェックしていくことになった。盲腸と出産の入院以外病気らしい病気もせず、大きな病院にお世話になることもなく、健康だけには自信があったし、嚥下性肺炎はお年寄りに起こりがちで自分にはまだ縁がないと高をくくっていただけに、今回の肺炎は美子にとってショックだった。耕介は子どもに言い聞かせるように言った。

「今まで大病院に縁がなかったことがラッキーなんだよ。周りを見

てごらん。怪我や病気で入院してる人がいっぱいいるよ。健康への過信は禁物。もうそんなに若くないんだし、食事もゆっくり噛んで食べること」

しばらくは食事や体調に気を配っていた美子だが、元気になり、穴も順調に小さくなってくると、喉元過ぎれば熱さを忘れるというように、肺の存在を感じることはなくなった。

八月になると、美子は塾の夏期講習に入って、二週間ほど毎日教えた。講習会では、高木という理系専門の若い男の先生とペアを組んで、私立高校を志望する生徒を教えることが多い。高木は塾に入りたての美子とペアを組んでとき、おばさんと組まされたことが嫌だったのか、

「沢井さん、しっかりしてくださいよ。オレ、頑張ってるのに足ひっぱらないでくださいよ」

などと、なめたことを言っていたが、一緒に協力して働くうちに、お互い気心が知れてくると、信頼感も生まれてきた。高木は美子の甘えのない勤務態度としっかり練られたティーチングを評価し、美子も彼が根は真面目な生徒思いの熱血漢だということが分かってきたのだ。

耕介は夏休み中も生物部の活動や副顧問になっているテニス部の試合の引率など忙しく、家にいることはめったにない。

「雑用が多いんだよ。休ませてくれ！」

と弱音を吐きつつ、容赦のない日差しの中をバイクで駆けていく。美子も耕介もお盆までは忙しかったが、なんとか都合をつけて、盆過ぎに初めて子どもたちを連れて、家族で海外旅行に行く計画を立てた。

五、家族旅行

四人での海外旅行は格安のファミリープランでタイに行くことになった。有名な観光地を少しずつ見て回る海外初心者向けのツアーに参加したのだ。パスポートを取りに行ったり、持って行くもののリストを作って買い物したりして、皆楽しみにしていた。

マニラ経由でバンコクの国際空港スワンナプームに着くとすぐに、国内線に乗り継いでリゾート地で有名なプーケット島まで飛んだ。空港には現地ガイドのソムチャイさんがワゴン車で迎えに来てくれていた。彼の運転する車がホテルに到着すると、ベルボーイが部屋まで荷物を運んでくれた。美子はチップをぎごちなく差し出した。

「チップっていう習慣嫌いだな。いくら渡したらいいか悩むし、何か相手を目下に見てるみたいだし」

「まあね。でも、考えすぎじゃない？　チップが当たり前の習慣と

いう国、多いよ」

耕介は大人の意見を言う。

部屋には甘い香りがする。ウェルカムサービスとしてタイのいろいろなフルーツがかごに盛られていた。子どもたちはゴージャスな雰囲気にテンションも高くなる。

「なんか、リッチな気分」

「フルーツ、食べ放題だ！」

二人ともおおはしゃぎで、マンゴスチンをほおばる。夕食はホテルでタイの爪踊りを見ながら、トムヤムクンと食べきれないくらいの魚介の塩焼きにギブアップしてしまった。

次の日は船でピーピー島に渡った。小さい島で断崖が連なっている。海ツバメの巣が高い岩場に作られている。海ツバメは集めてきた海草を唾液で固めて巣にするそうで、高級な中華料理の食材になる貴重なもので、高価で売れるから、危険を冒しても崖をのぼって取りに行くらしい。岩陰にはコウモリが群生していて、足元の岩にはコウモリの糞が幾重にも重なって落ち、黒く固まっている。酸っぱくて胸の悪くなるような刺激臭に、美子は咳き込んだ。肺の奥から次から次に嫌な音の咳が出てきて、息を吸うこともできないほどだった。慌てて、その場を離れようと向きを変えたとたん、足を滑らせて地面に手をついてしまった。ベットリと手についたコウモリの糞の異様な臭いは、いくらハンカチでこすっても、取れなかった。長居は無用と早々に船に戻り、プーケットのビーチに向かった。

ビーチにはきれいな白い砂浜が広がり、海は陸から離れるにつれて、エメラルドグリーンから鮮やかなブルーへと変化している。カラッとした太陽が降り注ぎ、海はキラキラと輝いて、リゾート地を絵に描いたようなところだった。海に面して、パラソルがいくつも並び、長イスには高齢の西洋人がたくさん横たわり、ゆったりとした時間を楽しんでいたが、耕介も美子も初めは勝手が分からず、とまどった。空いていた長イスに腰をかけ、その場の空気に馴染んでくると、子どもたちと海に入って少し泳いだり、砂浜のヤシの木陰で休んだりしてくつろいだ。ソムチャイさんもパラソルの下でサングラスをかけて昼寝をしている。豊かな時間が過ぎていく。日本では常にだんどりを考えて、生活している美子は、まぶしい光をバックにターコイスブルーの海と白い砂浜を描いた風景画の中に入り込んでしまったような感覚に襲われた。どこまでも平和でのどかな図だった。

プーケットに三泊してバンコクに戻った。バンコクでは朝のうちに水上マーケットを訪れた。ナンプラーの匂いと湿った空気の中に、そこで働く人々の汗や体臭の混じったエネルギーが溢れていた。日本人が失ってしまった生命力がそこにはあった。そのあとは有名な

お寺を巡った。どの寺院に行っても、タイの人々は線香と花とお供え物を手に、一心に祈っていた。タイが仏教国であることを改めて実感した。

このバンコクで家族にトラブルが発生した。美子を除いた三人が猛烈な下痢に苦しみだしたのだ。タイでは生水は絶対口にしないように気をつけていたので、どうして下痢になったのか不思議だった。しかし、今までの行動を振返ってみて、原因に思い当たった。プーケットでの最後の日、地元のレストランでカレーを食べたとき、ソムチャイさんが気を利かして、氷入りの水をグラスについで持ってきてくれた。美子は普段から食事中にあまり水を摂らないのでほとんど飲まなかったが、あとの三人はグビグビ飲み干していた。あの水に違いない。

耕介も子どもたちも痛む腹を抱えて、しょっちゅうトイレに駆け込まなければならないので、力が出ないようだった。耕介は反省する。

「油断してしまったね。生水の中にはいろんな微生物がいるんだ。現地の人は幼い頃から飲んでるから大丈夫だけど、ぼくたちは日本の水道水しか飲んでないからね」　美子は気味悪そうに尋ねる。

「微生物ってどんな？」

「大腸菌はもちろん、コレラ菌や赤痢菌があるし、原虫なら赤痢アメーバというのもある」

「目にみえないけどいるんだね」

「透明で冷たくておいしい水だったのに」

子どもたちがつぶやいた。

耕介が説明する。

「体の中は微生物にとって最適な環境だと思うから、どんどん分裂していくよ。２のＮ乗って・・・分かるかな。そして、菌の数が一定以上になると、その菌の出す毒が人体に悪さをするんだ。下痢とか嘔吐とか引き起こす。その便などが何かにくっついて、それが口を通して体内に入ると、またそこで増える。本能にしたがって自己コピーを作り増加していくのさ」

「ウゲッ！」

と叫び声をあげて、子どもたちは腹を押さえた。

耕介はさらに続ける。

「日本人の暮らす環境はとても清潔になってきてる。除菌とか消臭とか、菌や臭いは目の敵にされ取り除かれる。そんな状態で成長した子どもたちは菌に対する抵抗力が弱くなってしまった気がするね」

美子も同じ考えだ。

「そうね。昔、寄生虫持ってる子多かったものね。そのおかげで花

粉症にならずに済んでたっていう学者もいるし」
「そう、そう。一時サナダ虫に名前をつけて、自分の体の中で飼ってたらしいよ」
子どもたちは顔をしかめてうなる。
「気持ち悪。そんなの飼うんだったら、花粉症になったほうがましよ」
「花粉症ってかなりきついらしいよ。まあ難しい選択だな」
しつこい下痢をかかえたままの帰国となったが、前島病院で調べてもらったら、コレラとか赤痢とかの伝染性のものではなかったので、一安心した。しかし、微生物はあなどれないと、一同肝に銘じた。
日本に帰ってから、美子はタイを舞台にしたノンフィクションっぽい小説を読んだ。本にはプーケットについても書かれていた。その島にはヨーロッパ人が大勢滞在しているが、中にはタイの少年少女を金で性的な奴隷にする人がいるという。いたいけな子どもたちに薬物を使用し、奉仕させるらしい。また、臓器移植を求める日本人の女の子のために、タイ人の孤児が臓器を取られて、ゴミ袋に入れられて捨てられるという話もあった。ショッキングなことが次から次へ書かれていて辛かった。表面だけ見ると、穏やかで静かなリゾートだが、金にものを言わせた大人たちが増殖し、子どもたちを汚し、命まで奪っていると思うと、何も知らず、ただ目に見える光景に舞い上がっていた自分の無知が恥ずかしく、己の無力がただただ情けなかった。

六、戻ってきた日常

九月になり、新学期が始まると、子どもたちは二人ともクラブ活動に忙しい。春子は週三回テニスクラブで絞られている。外部からテニス部強化のコーチが入り、生徒たちを鍛えているらしい。とはいえ、春子は高校でテニスを始めたばかりなので、ボール拾い専門のようだが、仲のよい友達が二人できて青春している。夏生は小学生の頃は地元の少年サッカーチームに入っていたが、心境の変化なのか、中学ではハンドボール部に入部し、肝っ玉母さんのようなごつつい女の先生の指導を受けている。二人ともそれほど運動神経がいいほうではないが、成長期にスポーツをするのはいいことだと耕介も美子も喜んでいる。
耕介は秋から冬にかけて、学校行事がてんこもりで大変だった。それは生徒たちが潜在能力を発揮する場でもある。
体育祭は一年、二年、三年という学年の枠を取り払って、赤、青、黄、緑の四つのブロックに分かれて競うので、応援合戦やリレーな

ど当日はブロック対抗で燃える。

文化祭は一般に開放して行われる。教室には研究発表や模擬店が用意され、体育館のステージでは様々な企画の中からオーディションで勝ち残ったクラスや有志の劇や歌などが披露され、日頃の成果を地元の人や他校の生徒にもみてもらうことになる。どの教室も準備のため、遅くまで生徒が残るので、教師は放っておくわけにもいかない。女の子の一人歩きは物騒なので、グループで帰すとか男の子に送らせるとか安全に帰れるような配慮をしなければならない。

耕介は行事で生徒の異なる一面を目の当たりにするのが楽しい。授業中は死にかけている生徒が颯爽とトラックを駆け抜けたり、日頃おとなしくて目立たない生徒がギターをかきならしシャウトする様は感動的だ。最近は大学進学のための勉強を優先して、行事は軽視されがちだが、行事を通じて、互いに協力して何かを作り上げ、皆の前で発表する喜びを知る機会を与えてやることは、学校教育において大切な役目だと耕介は常々思っている。

美子は日赤で肺の穴のチェックを九月、十月、十一月と続け、穴は順調に縮んできているので、手術をするまでもないと言われ、ホッとした。ところが、塾の冬講に入って疲れが出たのか、年末に風邪を引き、二日ほど寝込んでしまった。咳がしつこく残り、痰が妙な色をしているようで気になったが、一週間もすると回復し、大掃除、御節作り、餅つきなどいつも通り行い、穏やかな正月を迎えた。

正月休みが終わると、塾は受験一色に染まる。

受験は塾にとって最大のイベントである。受験日当日は、講師たちは二、三人ずつのグループに分かれて、異なる試験会場である高校に応援に駆けつける。早朝からスタンバイして、塾生一人ひとりに携帯カイロを手渡し、励ますのだ。その後急いで塾に帰り、受験問題が手に入ったら、即解答を出す作業に取り掛かる。そして、合格発表の日、不合格だった生徒から連絡が来たら、すばやく次の手を考える。これから受験できる学校を調べ上げ、願書を出すよう指導する。いいか悪いかは別にして、手当てがすばやく的確に行われる様子は、やはり受験のプロだなと感心させられる。

七、手術

春が巡ってきて、四月に美子はまた肺のチェックに行った。穴はかなり小さくなっているので、毎月行っていた検査はもう必要ないだろうと、次回は半年後の十月に予約を入れた。

ところが、十月のＣＴを見ると、穴は逆に大きくなって、腫瘍マーカーのＣＥＡの値も上昇していた。その検査結果を見た杉本先生はこれはおかしいと、脳のＭＲＩや骨シンチの検査、内視鏡で肺の

組織を取る検査をしたが、癌と特定するものは見つからなかった。美子は不安が取り除かれたと思ったのだが、先生は癌ができていようといまいと、肺の穴は手術で取り除くべきだと判断し、呼吸器外科に紹介状を書いてくれた。

外科部長の井上先生は、ＣＴの画像を一目見るなり

「これは十中八、九、癌ですな。なるべく早く手術したほうがいい」

と断言した。

美子は混乱していた。この半年の間に、今まで順調に小さくなっていた肺の穴に何が起こったのだろう。何の自覚症状もないのに、体細胞の異常な増殖が進んでいたのだろうか。美子は癌であることを覚悟しつつもそんなはずはないと、自分の状況がまるで他人事のような感覚の中にいた。そんな美子の感情をよそに、手術の詳細はあわただしく決まっていった。

耕介と美子を前に、井上先生は肺の図がプリントされた紙に手術の箇所などを書き込みながら説明した。

「肺は右肺が三室、左肺が二室に分かれています。沢井さんの場合、右の一番上の部分に肺癌と思われる腫瘤があるので、右肺上葉を全部取り除きます。手術はまず喉の下を切って管を通し、縦隔鏡検査をします。それで転移がなければ、胸を開くのではなく、胸腔に二つ穴を開けて、胸腔鏡を使って、右上葉部を切り取ります。縦隔鏡検査次第で手術の仕方は変わるかもしれませんが、多分転移はないと思うので大丈夫でしょう」

二人は先生の説明にうなずき、よろしくお願いしますと言うしかなかった。

「入院はどれくらいになりますか」

「術後の状態にもよりますが、手術前も含めると、三週間程度になるでしょう」

手術の日にちも入院期間も分かったので、美子は塾に十一月中旬から十二月いっぱい休むことと、来年一月からは出勤できることを伝え、了承をもらった。同僚からは温かい応援メイルや手紙をもらって、心からありがたいと思った。耕介も子どもたちも家事を分担してやってくれると言う。

美子は当座の生活に必要なものと本を数冊持って入院した。大部屋は四人部屋で、窓側に二つ、廊下側に二つ、ベッドが並んでいて、各々のベッドはカーテンで仕切られていた。美子は廊下側の暗いベッドに入った。入院したといっても元気なので、肺機能や心電図の検査が終わると、時間をもてあました。授業の準備も御飯の支度もする必要がないので、久し振りにゆっくり推理小説を読んだ。耕介が仕事の帰りに病院に寄った。

「なんかリラックスしてるじゃないか」

「そう。御飯もおいしいし、読書もできるし」
「あした手術だろ。大丈夫？」
「午前中に麻酔科に行ってきた。下剤もさっき飲んだよ。完璧よ」
「良性のものだったらいいんだけどな」
「覚悟はしてる」
「あした十時からだよね」
「九時半頃呼びに来るって言ってた」
「じゃ、九時頃また来るよ。あしたは病院に泊まるからな」
「いいよ。完全看護だし、子どもたちも心配だし」
「春子がいるから、一晩くらい平気さ。なるべく眠っとけよ」
「うん」
耕介も帰って、九時には消灯時間を迎えた。九時半ごろ暗くなった病室の入り口にだれかが立っている。
「沢井さん、あした執刀することになった森下です」
「えっ？　井上先生じゃないんですか」
「井上先生とボクとで沢井さんを担当するんですが、実際に切るのはボクです」
「そうなんですか」
美子は丸刈りにした背の高い、いかにも若い医師を見つめた。
「沢井さん、英語の先生ですか。ボク、英会話を勉強しないといけないと思ってるんですけど、だれかいいネイティブ、紹介してくれませんか」
「はあ、英語の先生といっても、塾で受験用の英語を中学生に教えてるだけだから、ネイティブと言われても…」
「そうですか」
美子は手術を明日に控えた患者に妙な頼み事をする若い医師の無神経ぶりにあきれてしまった。部長に切ってもらえると思っていたのに、こんな若い頼りなさそうな子に身を任すのかと思うと不安でたまらない。しかし、今となってはまな板の鯉。
「よろしくお願いします」
「はい、おやすみなさい」
彼はスタスタと立ち去った。
手術当日は朝から浣腸やら点滴やらであわただしく、九時半頃同室のみんなに行ってらっしゃい、がんばってねと見送られ、手術室に向かった。耕介と美子の母は手術が終わるまで談話室で待つという。兄夫婦と同居している高齢の母に、美子は
「ずっと座って待ってるの大変だから来なくてもいいよ」と言ったのだが、母は譲らなかった。
「娘が大手術してるのに、家でいてられるわけないわ。何もしてやれんけど、ここにいて、元気な顔、見たいんよ」

手術室に入り、スタッフの紹介の後、手術台に横たわって、麻酔の点滴が始まると、いつの間にか意識がなくなった。どのくらい眠っていたのだろう。目を覚ますなり、

「沢井さん、癌でした」

と告げられた。

「そうですか」

と答えながら、少々朦朧とした頭で仕方ないなと受け入れた。すぐにベッドのまま術後の個室に運ばれた。時計の針はもう四時を回っていた。

病室では耕介と母が心配そうな顔をして待っていた。

「大丈夫よ

美子は笑顔を見せた。

だが、体は右向きに長時間固定されていたままで固まってしまって痛い。その右腋からは太いチューブが二本出ていて、その先には赤く色づいた体液が溜まったビニール袋がついている。尿を出す管も入っているし、両足はエコノミー症候群防止のためにマッサージ器みたいなものに固定されている。左手に点滴の管、背中には痛み止めの薬を流す細いチューブ、顔には酸素マスクというふうに、体中チューブだらけで、身動きがままならない状態だった。

しばらくすると、森下先生が入ってきて異常はないか確認していった。美子は仰向けで動けないが、意識はしっかりしていて元気だった。

耕介と母は美子の摘出された肺と癌を見た報告をする。

「癌はピンポン玉くらいのおっきさだったよ。赤黒くて何か邪悪な感じがしたな」

「ねえ、肺ってどんな色？」

「茶色だったわ。レバーみたいに」

母が答えた。

「あれっ？　泡っぽい灰色じゃないんか。わたしも見たかったな。自分の中にあった臓器と癌よ。どうしてわたしに見せてくれないんだろう？」

美子は珍しい体験をしそこなってくやしくてたまらなかった。

「あんまり気持ちのいいものじゃないからな」と耕介がなだめる。

「癌の中身って、どんなだった？」

美子はピン玉状の癌の断面に思いをめぐらせたが、耕介は美子の期待に反して答えた。

「それは見なかった。森下先生が癌を切ろうとしたんだけど、あいにくメスが見当たらなかったんだ。で、胸に差していたボールペン二本使って何度も切ろうとしたんだけど、なかなか切れずに困って

るのを見て、もういいですって言ったんだ」
「ボールペンであちこちつつくんやで。見てられなかったわ」
と母は怒っている。
「おもしろい先生ね」
美子は逆に執刀医に親しみを感じた。
その時ドアがノックされ、呼吸器内科の杉本先生が現れた。
「沢井さん、どうですか。悪性のものだったけれど、きれいに取れたようですね」
「思ってたより大きな癌でした」
「そうですね。今晩は眠れないと思いますが、すぐによくなりますから、がんばってくださいね」
「はい。ありがとうございます」
杉本先生はいつも宣教師のように優しい口調で話す。呼吸器の看護師さんたちは口をそろえて言う。
「杉本先生に任せておいたら、心配ないですよ。患者さんには優しいし」
美子は「患者さんには」というフレーズが気になった。
「ということは、看護師さんには優しくない？」
「とても厳しいです。頭が切れすぎて、ついていけません」
看護師さんたちが皆畏怖し、医師としての技量に太鼓判を押す先生なら信頼できるだろうと気持ちが楽になった。
五時を過ぎると、学校が終わった子どもたちがやってきた。春子はチューブに繋がれた美子の姿に絶句し泣き出し、夏生もじっと涙をこらえている。
「大丈夫よ」
美子は子どもたちを笑顔で励まし、手術の様子など説明した。美子がしっかり話すのを見て、子どもたちは安心したのか話の合間に笑顔も見せた。子どもたちの話から、家がなんとか回っているのが分かって美子もホッとした。
手術したばかりの病人を疲れさせてはいけないと
「また来るからね。がんばってね」
子供たちと美子の母は帰っていった。
だれもいなくなった病室で美子は天井の模様ばかり見つめていた。
耕介は、皆を食事に連れて行って、その後母を車で送り届け、八時頃布団を抱えて病室に戻ってきた。
「子どもたち、自転車でしょ？　大丈夫かな？」
「一人じゃないからな。戸締りしっかりするよう言っておいたよ」
「そう。おばあちゃんは、こっちが世話しなくちゃいけない立場なのにね」
「仕方ないよ」

耕介はソファーをベッドに作り変え、布団を敷くと、手術について部長と森下先生が語ったことを伝えた。
「縦隔リンパ節への転移は認められなかったので、予定通り胸腔鏡手術をして、癌のあった肺の右上葉を切除したそうだ。正確なことは十日後くらいに出る病理検査の結果を診ないと分からないらしい」
「じゃ、その時詳しく説明してくれるのね」
「そうなるね」
「麻酔、切れてきたんかな。痛み出したわ」
「痛さは我慢しないで痛み止め使ったほうが回復が早いと看護師さん、言ってたよ」
「そうね。痛み止め、バンバン使うわ」
その夜は、寝返りを打とうにも、足も手も動かせない状態で、痛みも増す一方だった。こんなのが続くのだったら、耐える自信がないと思いつつ、うとうとして過ごした。しかし、翌日になると、尿チューブが抜けて、自分でトイレに行けるようになった。酸素ボンベを引きずりながら、二つの廃液袋をひっかけた点滴スタンドを持って、ヨタヨタと歩いた。歩けるようになると、両足の圧縮器は要らなくなって、ずいぶん楽になった。さらに次の日には点滴も酸素マスクも外れ、痛みも和らいできた。人間の回復力のすごさを今回身をもって感じた。
徐々に動ける範囲も広がって、元気が戻ってきたので、大部屋に移してもらった。師長さんに手術直後は個室に入るよう言われたので入ったが、一日一万円以上もかかるので、ゆっくり入っているわけにはいかないのだ。今度は窓側のベッドに当ったので、ブラインドを開けるのが日課になった。晴れの日は朝日が差し込み、幸せな気分になる。大部屋は各ベッドがカーテンで仕切られているものの、プライバシーはなきに等しい。医者と患者の話は筒抜けで、患者が何の病気で今どんな治療を受けているのかだいだい分かる。患者自身、自分の病状をあっけらかんと話す傾向もある。バッグ一つで向かいのベッドに入ってきた四十代と思われる女性は、ベッドを整えてパジャマに着替えるとカツラを取って帽子を被った。
「子宮癌よ。癌マーカーが上がるたびに、入院して抗がん剤、打って、下がったら退院するのよ」
どうやら日赤のお馴染みさんのようだ。リンパに転移もあるそうで状況はかなり厳しいが、パワーに溢れている。
隣のベッドのおばさんも負けてはいない。
「十年前におなかがパンパンに腫れて救急で着たら、即入院。卵巣癌で手術できないって言われたけど、まだもってるで」
点滴は十時間近くかかるものもあるので、体力のある人は点滴台

を転がしながら、トイレに行ったり、売店まで買い物に行ったりと忙しい。病室や廊下、談話室から聞こえるにぎやかなおばさんたちの声に、時折看護師さんたちの声がまじる。若い看護師さんたちがコロコロとよく笑い、かわいい高いトーンの声で話すのに引き換え、おばさんたちは地獄から響いてくるような低音でドスの利いたガラガラ声で精力的にしゃべる。女性の声は年とともに低くなることを発見した。ホルモンが関わっているのだろう。

入院してみると、癌の人の多さに驚く。美子のいる階には呼吸器と婦人科関係の癌の人が入っているから、女性の患者さんが圧倒的に多い。高齢の人が多いが、中には二十代と思われる患者さんもいる。若くして子宮や卵巣を失ってしまう人も少なくない。手術する人、した人、化学治療を受ける人、放射線治療を受ける人が入院しては、退院していく。

そして、十日ほど経ったある日、病理検査の結果が出たので、美子と耕介は別室で外科部長と森下先生から改めて結果の説明を聞くことになった。森下先生が肩を落としているように見えたので嫌な予感がした。まず、部長が淡々と告げる。

「肺腺癌です。縦隔リンパ節に転移はなかったと以前申し上げましたが、病理検査の結果、微小ながら転移が認められました。それで、癌の進行段階でいうと、３ａになります。生存率は三、四割です。いったん退院してもらいますが、体力が戻ったら、内科のほうで化学治療するために、また入院してもらうことになります。抗がん剤治療はかなりきついものになると思います」

森下先生は残念そうに言った。

「沢井さんの癌は近くに飛ばないで、遠くのほうにほんの少し飛んでたんです。ちょっと珍しいケースですね」

耕介と美子がうなだれながら部屋を出ると、杉本先生が待っていて、これから行う化学療法に関して説明してくれた。

「リンパ節に転移があろうとなかろうと、初めから化学治療は受けてもらうつもりでした。癌が発見されたら、最初の治療が癌が完治するかどうかの決め手になります。手術で患部を取り除いたあと、念のため抗がん剤の点滴で叩いておく必要があります。抗がん剤を二種類、シスプラチンとナベルビンを使うことで生存率が十パーセント上がるというデータがあります」

「十パーセントですか」

美子はがっかりする。

「ただ、プラチナ製剤にはかなりきつい副作用をともなうことがあります。食欲不振、嘔吐、脱毛、白血球の低下などで、どう出るかは人によって違います。初めて打つときはショック症状も考えられますので入院したほうがいいと思います。七時間ほどかかりますし」

「どのくらいの期間、するんですか」
「まずシスプラチンとナベルビンを打って、一週間ずつあけてナベルビンを二回。この三週間で一クールになります。それを四クール行うつもりです」
美子は治療の説明を聞きながら、これからの日々を想像すると暗澹たる気持ちになった。耕介と二人になってから、美子はつぶやく。
「初めステージ２ａがいきなりステージ３ａになっちゃった。生存率って何？」
「五年後も生きている確立かな？」
「つまり、治療しても六、七割の人が五年生きられないってことでしょ」
「三割のほうに入ればいいんだよ」
「どうやって・・・。　まあ、やるだけやるしかないけど」
「ボクも癌家系だからな。父親が胃癌、母親が肺癌だろ。癌になりそうだな」
「わたしも父が肝臓癌で死んだわ。癌って遺伝するの？」
「それは分からないけど、糖尿病の家系とか脳卒中の家系とかあるように癌の家系もあるんじゃないか？　ＤＮＡに何か書き込まれているのかもしれないな。そうじゃなくても、体質は遺伝するし、食習慣、生活習慣は引き継がれるところがあるからな」
「わたしの場合は肺にあいた穴を塞ごうとして、体細胞ががんばりすぎた結果、癌になってしまった。まあ言うなら突発的な事故のように思えるんだけどな。」
美子は一月からの職場復帰は無理になったこと、できれば新学期からまた働きたい旨を塾にメイルした。折り返し、教務からメイルが入った。今は治療に専念してください。一日も早く復帰されることを心待ちにしていますという内容で、発信者は駅前校代表上野となっていた。上野先生が校責に戻ったんだと思うとうれしくなった。
美子は癌であることを隠す気はまったくなかった。癌は日本人の二人に一人がかかるというありふれた病気の一つだから、悲愴がらず、秘密にせず、持病と思って付き合っていきたいと思っている。
同僚の橋爪先生と西川先生からもメイルが届いた。
「癌治療は日進月歩の部門です。しっかり治療してまた一緒にはたらきましょう」
「いつものパワーで癌なんて、蹴散らしちゃってください」
同僚の励ましは復帰への強い思いにつながった。
一時退院も近づいた日、美子は今後の治療スケジュールを確かめたくて、森下先生に尋ねた。
「先生、内科の治療は一月から始まって、３月中には終わりますか」
「うーん、ちょっと待ってね。何か紙ないですか」と言いながら、

自分の白衣のポケットをごそごそ探して、白い紙らしきものを引っ張り出した。美子はその紙に印刷された水引きを見逃さなかった。
「あれっ、それって寸志？」
「あっ！」
「あらら、そんなのもらっていいのかな」
「いや、無理やり突っ込まれてしまって」
その不用意でがさつな行動に美子は笑いが止まらなかった。そんなちょっと抜けた先生だが、外科医としてのセンスは素晴らしいものを持っている。
まず、体内からチューブを抜いた後の縫合を見た看護師さんたちは皆感心して尋ねる。
「きれいに縫ってくれてるよ。先生、だれ？」
「森下先生」と答えると、若い看護師さんたちはクスッと笑いながら、納得した。なぜ笑うのかはなんとなく想像がつく。また、動脈血の採取がとても上手だった。手術前他の先生に取ってもらったときは、手首の血管に何度も針を突き刺し、入ったと思いきや、その中でまた針の先で探るので、かなり痛くて、あとで紫色に内出血したのだが、森下先生は、ふらっと病室にやってきて、ティッシュの箱を台にして
「ちょっとチクッとしますよ」と言った次の瞬間、
「はい、終わりました」と血を持って去っていった。覚悟していただけに、あっけなさに拍子抜けしてしまった。手先の感覚が鋭いのだろう。弱冠二十八歳だという。頼もしい限りだ。杉本先生といい、森下先生といい、美子は医師に恵まれている幸運を感謝した。
退院して我が家に戻った。やはり家はいいものだ。耕介は美子のために低反発のマットを買って敷いてくれていた。硬い布団に寝ると背中や横腹が痛いからだ。寝ているときも体を支えるために様々な骨や筋肉が関わっているのだろう。
春子は飛んで来て
「お帰り。お母さん、大丈夫？　痛い？　聞いて！　わたしね、ゴミも分別して出したのよ。洗濯もたたんだし、それから・・・」
夏生も割り込んできて
「ボクも毎日風呂洗いしたよ。晩御飯のあとの皿洗いも手伝ったよ」
「二人とも大変だったね。ごはんはどうしてたの？」
春子が答えた。
「朝はパンと牛乳とバナナでしょ。昼のお弁当はお父さんが頑張って作ってくれたよ。ウィンナーと出汁なし卵ばっかりだったけど」
耕介が叱る。
「ぜいたく言ったらだめだろ」
「晩はわたしが焼きそばとかカレーとかハヤシライスとか作ったん

よ」
得意気に春子が言うと、夏生が不満そうな顔をして
「お姉ちゃんの料理、いつも一品だけだよ」
などと憎まれ口を叩く。
「みんな、助け合って偉かったね。長かったでしょ？
美子がねぎらうと、春子が心配そうに言った。
「お母さん、やせちゃったよ。しっかり食べて栄養つけないと」
一月からは抗がん剤の投与が始まって、食べられなくなるかもしれないから、ここで体力つけておかないといけないと美子自身も感じていた。

七、化学療法

美子は正月三が日を自宅で過ごし、四日には再入院して抗がん剤の点滴を打った。予想に違わず、なかなか厳しいものだった。
一クール目はまだ元気だった。一度に三リットルもの水分を血管から注入するのだから、顔も体もむくむのは仕方がないが、二、三日すると、味覚が変わってきて、妙なものが食べたくなった。カレーとかたこ焼きとかカッパ巻きとか、遠い昔に経験した悪阻のようだった。
朝食に出るパンが喉を通らず、バナナを食べていると、外科の森下先生がいきなりカーテンを開けて、顔を見せた。
「どうですか？　食事、摂れてますか。きのうの記録を見ると、カレーヌードル、食べたとか書いてるけど」
「なんか変なものが食べたくて。お茶漬けとかも食べられるから、今のところ大丈夫です」
「そうですか。食べられるもの、見つけて少しずつでもおなかに入れてくださいね」
「はい、ありがとうございます」
美子は外科の手を離れてしまった今も気にかけてくれているのだなとうれしかった。
二クール目になると、吐き気がひどくなり、食べ物も飲み物も受け付けなくなった。食事時間に食べ物の匂いがしてくるだけでも気持ちが悪くなった。見かねた隣の人がグレープフルーツのゼリーをくれた。いつもならペロリと食べてしまうのだが、半分食べるのがやっとだった。
三クール目は最悪だった。それまでは土、日は外泊許可をもらって家に帰っていたので、今回も帰ったのだが、衰弱が激しく救急に行くと、脱水症状を起こしていて、点滴してもらった。
月曜日に病室に戻ると、杉本先生が来て言った。

「辛そうですね。四クール目はやめましょうか」
美子は涙目で大きくうなずいた。三クール行った場合と四クール行った場合の効果に有意差はそれほどないらしい。ところが、耕介と子ども達がどうしても四クール目もやってほしいと強く望むので、美子も折れて、仕方なく四クール目もやってもらった。家族を納得させるために気の進まない治療を受けることもあるということを知った。幸い、四クール目のダメージは思ったほどではなかった。
美子は自分自身が化学治療を体験して、抗がん剤の副作用のせいで食べることに問題を抱えている人がたくさんいることを知った。
「一口も食べられへんかったわ」
「ごはん、磯じまんかけてちょっと食べたわ」とか
「きょう昼カレーうどん、出前してもろた。おいしかった」
とか病棟のあちらこちらから声が聞こえてくる。皆、食べられるもの探してるんだな、もっと食べることに一生懸命にならなくちゃと美子は食べたものを戻すのが嫌で、食べる努力をしていないことを反省した。そして、甘いものやパンはだめだが、麺類やイモ類、アボガドが少量食べられることを発見した。
抗がん剤の点滴が終了したら、今度は外科から出される抗がん剤のカプセルを一日三錠ずつ飲んだ。
化学療法が終わってからも、長い間味覚障害は残り、味噌汁と甘辛い煮物は美子のレパートリーからしばらく消えた。髪の毛はたくさん抜けてボリュームは減ったが、かろうじて体裁は保たれていた。

八、支え

美子には心が弱ってくると、決まってメイルしたくなる人物がいる。大学のときの恩師である島田先生だ。退院した後、弱音や泣き言を書き連ねて送ったところ、返信には「病者の祈り」という作者不詳の英詩が紹介されていた。

大事なことを成そうとして、力を与えて欲しいと神に求めたのに
慎み深く従順であるようにと弱さを授かった
より偉大なことができるようにと健康を求めたのに
より良きことができるようにと病弱を与えられた
幸せになろうとして、富を求めたのに
賢明であるようにと貧困を授かった
世の人の賞賛を得ようとして、権力を求めたのに
神の前にひざまずくようにと弱さを授かった
人生を享楽しようと　あらゆるものを求めたのに
あらゆることを喜べるようにと生命を授かった

求めたものは一つとして与えられなかったが
願いはすべて聞き届けられた
神の意に沿わぬ者であるにもかかわらず
心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた
私はあらゆる人の中でもっとも豊かに祝福されたのだ

その詩とともに、いつも沢井さんのことをお祈りしていますというクリスチャンらしいひと言が添えられていた。

島田先生は、在学中も卒業してからも、美子が必要とする情報に関して的確な文献やウェブサイトを紹介してくれる。それればかりか、美子の悩みや怒りに対しては、思い遣りのこもった言葉を投げかけてくれる。まるで美子の心の中が読めて、欲しい言葉が分かっているようなのだ。今回も紹介してくださった詩は心の深い部分に強く響いた。

美子は自分がとても恵まれていることを感謝せずにはいられなかった。癌という病を得たからこそ、家族の大切さ、その存在の大きさに気付くことができた。同僚の優しさ、恩師の思いやりに触れることもできたし、医師や看護師の献身的な働きを目の当たりにする機会も得た。何よりも、癌をはじめ、自分の侵された病の名前さえ確定できない患者さんや原因不明ゆえに治療法も分からない難病に苦しむ患者さんが大勢いる、しかも、厳しい現状にありながらも、底抜けに明るく生きているということを知ることができた。自らが病気にならなければ、他人事として、知らないまま通り過ぎてしまったであろう世界である。

また今まで健康を前提にした人生を過ごしてきた美子にとって、これからの生き方を考えるよい機会にもなった。限られた時間なら、何がしたいのか、何をするべきか、生まれて初めて真剣に答えを探した。そして、出した答えは、今の生活をできるだけ続けたいということだった。特別に何かしたいとか、どこかへ行きたいとか、欲しいものは全く思いつかなかった。それは、きっと今が幸せな証拠なのだろう。

四月からは職場にも復帰し、毎月健康チェックをしながらも平穏な日常を送っていた。

九、キャンプ

今年の夏休みは、耕介の学校の生物部有志に里村、洋子、それから美子と春子と夏生も加わって、少年自然の家にキャンプに出かけた。里村がちゃっかり洋子と付き合っているという報告を受けた耕介は冷やかす。

「休みの日は寝て暮らしてると思ってたけど、やることはやってるんだな」
「洋子ちゃんは論理的な思考ができて、しかも、優しい子だよ。放っておく手はないさ」とのろけが返って来た。
里村と耕介の車二台に、米などの食材や燃料、調理器具、寝袋など、二泊三日テントで生活するのに最低限必要なものを積み込んで、総勢十一人でワイワイ出発した。
そこは森の中にあるキャンプ場で、テントは借りられるし、水道や調理場もあって、キャンプ場としてかなり整備されていた。周りの森を散策できて、下に下りていけば海にも出るので、海の生き物も観察できる。車で少し走ると、国民宿舎があるので、風呂に入りたければ、そこの風呂を利用することもできるというワイルドさには欠けるが、初心者でも十分楽しめる施設だ。
到着したら、まずテントを三つ張った。慣れないとテント張りにはなかなか苦労する。汗だくになって張り終え、昼はソーメンを湯がいて食べた。野外で食べるぬるいソーメンは、それでもおいしかった。昼からは海辺に下りて、いろいろな生き物を見て、触って、写真に撮った。岩の上を一斉に群れて動くフナムシに驚いて、足がすくむ女子生徒もいる。
「フナムシってゴキブリにしか見えないわ・気持ち悪！」と遠くから眺めている。耕介は大声でへっぴり腰の女の子たちを促す。
「フナムシは噛まないよ。大丈夫！　早くおいで」
慣れてくると、フナムシを怖がることもなくなり、カメの手やフジツボ、オレンジ色の海綿体、波に打ち寄せられてくるアオサやホンダワラ、テングサの類を携帯やデジカメにおさめている。
「先生、ウミウシ、いるよ」
「この辺りには、こんなムラサキっぽいのばっかりだけど、ウミウシっていろんな種類がいて、青や赤や美しい色のものが多いよ」
「先生、アメフラシとウミウシって同じ？」
「ウミウシという大きなカテゴリーに中にアメフラシもいるんだよ。アメフラシは刺激すると紫色の液を出すね」
美子はしみじみとつぶやく。
「生き物なんでもだけど、ウミウシって生き物は一種類だけでもいいのに、たくさん種類があるのよね。カラフルだし。なんのために、誰のためにきれいな色の体があるのかしらね。不思議だわ」
「不思議ですよね。生き物ってものすごく種類が多いでしょ？　虫も魚も鳥もよく似てるけど違う種類ってことがあるし。それぞれの個体が生まれた環境に適応した形に分化していくのかな。それとも、その環境に適した形態を持つものが発生するのかな。鶏と卵みたいですね」

洋子も首をかしげている。
「先生、絶滅危惧種とか問題になってるけど、こんなにいっぱい種類があるんだから、その中の一つの種がなくなっても大丈夫なんじゃないんですか」
生徒は疑問を口にする
「動植物は複雑に依存しあってるからね。一つの種がなくなると、生態系のバランスが壊れて、いろんなところに影響が出てくるよ。どうして絶滅しそうなのかが問題だよね。大概は人間のせいだから人間の対処の仕方で防げるものだ」
耕介は答えた。しかし、里村は少し違う見解を示した。
「人間の行状も含めて自然淘汰のような気がする。生き物はゼロからスタートして、数も種類も爆発的に増加するけど、一定量に達すると、頭打ちになってから、徐々に淘汰されて減少して、平衡を保つポイントを見つけ生き延びるか、あるいはゼロに戻ってしまうかだと思う。今の環境に適応できなければ、絶滅もやむを得ないのじゃないかな。同じ状態でいることは不可能さ。」
「そんなこと言ったら、風当たり強いだろ？」と耕介が言っても、
「まあね。でも、オレはそう思う」
と里村は強気だ。
「先生、人間はまだ増加している途中ですか」
「地域によって違うよね。まだまだ人口増え続けてるところもあるし、もう減少傾向にあるところもあるだろ？人間も生物の一種にすぎないから、絶滅するかもしれない」
里村は生徒を脅す。
生徒たちが妙に沈んでしまったので、美子は大きな声でみんなを海に追い立てる。
「さあ、豊かな海を感じておいで！」
ジャブジャブと海に入っていった子どもたちは歓声を揚げながら、水を掛け合ったり、ビーチボールで遊んだり、疲れを知らない。その様子を見ていた美子がため息混じりに言う。
「若い子たちはピチピチしてるね」
「おばさんっぽい発言だな」とあきれる耕介。
海遊びのあとは風呂に入りに行って、夜はキャンプ定番のカレー。洋子が指導してくれて、男の子も女の子も米をといだり、野菜を切ったり、サラダを作ったりと楽しそうだ。里村が辛口にこだわったので、超辛いカレーを汗を拭き拭き食べ、ごはんの残りは梅干を入れたおにぎりにした。おにぎりは夜のうちになくなっていた。
二日目は朝から山歩き。鳥の声を聞きながら、珍しい草や虫に出会ったら、写真に撮って、見つけた場所やそのときの様子などをメモするようにした。

「カブトムシいるかな？」
夏生は期待している。
「カブトムシはどうかな？セミはあっちこっちの木にくっついてるから、すぐ捕まえられるけど」
男子生徒が網でセミを捕った。セミの腹をまじまじと見ていたと思ったら、素っ頓狂な声で叫んだ。
「セミのおなかに何かくっついてる」
みんな集まって覗き込む。
「セミに寄生するヤドリガの幼虫だよ。ヒグラシやミンミンゼミの腹にしがみついて、体液を吸って育つんだ」
里村が解説する。
「えっ！」と驚く生徒の顔を見た里村はエンジンがかかる。
「モンシロチョウの幼虫に卵を産みつけるアオムシコマユバチっていうのもいるよ。ハチの幼虫は寄生した虫の体を中から食べて成長し、やがて、その体を突き破って出てくる」
「それって、エイリアンの世界だ！」
「麻痺させたアオムシを巣に持って帰って、卵から孵った自分の子どもにフレッシュなまま食べさせるハチもいるし」
「恐ろしい。生きながら食われるんだ」
「人の体にだって寄生している生き物がいるよ」
里村が続けると、すかさず男子生徒が答える。
「寄生虫だよね。カイチュウとかギョウチュウとかね」
耕介も参加する。
「昔は肥料に人糞、使ってたから、寄生虫が野菜を通して、口に入ってきて、寄生虫がおなかにいる人多かったよ」
「汚い！」と子どもたちは大合唱した。耕介は話を広げる。
「生き物の世界は弱肉強食。人間だって他の生き物のエサになることもあるさ。寄生虫よりもっと小さな病源菌とかも人体に寄生してることになる。ただ、寄生する場合はある程度本能をコントロールしないと、宿主を殺してしまう。宿主が死んだら寄生してるほうも死んでしまうから」
すると、里村が自分の考えを述べた。
「個体は滅びても、ＤＮＡが残せる、つまり、種が繋がっていけばいいんだという潔さみたいなものを、生き物は持ってるような気がする」
耕介も口をはさむ。
「利己的遺伝子説？」
「利己的遺伝子って何ですか」
生徒も興味津々だ。
「遺伝子っていうのは自分さえ助かればいいと思う利己的なやつで、

人の体はその遺伝子たちの乗ってる乗り物に過ぎないっていうんだ。親の自己犠牲的な無償の愛に見える行動も、遺伝子にとって有利なように動いてるだけだという説をイギリスのドーキンスという人が発表してセンセーションを巻き起こしたんだ」

「おもしろい！」と目を輝かせる子どもたち。

「いろんな意味で画期的な説だよね。その説のおかげで、今までの親の行動が理解できたという子や、無償の愛なんてないことを知って、救われた子どもたちもいたようだ」

「親の無償の愛が存在しないほうが救われるの？」

「無償の愛があると期待すると、親に愛されてると実感できていない子どもたちは、自分がおかしいのかと、自分を責めたり、自己否定したりしがちだからね」

「親子関係も兄弟関係も微妙でむずかしい」と神妙な顔をして納得する子どもたち。

歩きながら、様々な話が出て、みんな頭をフル回転させている。その間も、珍しい花や虫にカメラを向けていた。

午前中に集めた写真を整理するため、昼からは少年自然の家の研修室で、コンピュ―タを用い写真をプリントアウトし、図鑑などで名称や特徴を調べた。それでも分からないものについては、耕介や里村や洋子に尋ねることもある。

「先生、これ、何ですか」

「チョウセンアサガオだな。これには毒があるんだよ。これの根をゴボウだと思って、キンピラにして食べて、中毒を起こす事件があったんだ。記憶障害を起こすこともあるらしい」と耕介。

「怖い！」

「よく見かけるスイセンやアジサイの葉にも毒があるから、気をつけないといけないわ」と洋子も注意を促す。

「そう、そう。野草もキノコと同じように毒を持つものも交じってるから、むやみに口に入れないようにね。なぜ毒をもってるのか考えるとおもしろいかもね」

里村は子どもたちの関心を深めようとする。生徒たちは先生や図鑑やウィキペディアなどを駆使し、森の生き物についてまとめあげた。その夜は焼そばを食べた後、花火をして遊んだ。もうもうと立ち込める花火の煙の中の顔はみんなかわしらしかった。翌日は朝からテントをたたみ、後片付けをして午前中に生徒たちを学校まで送り届け、里村と洋子は耕介の家に立ち寄った。

十、カビ説

里村が美子の体を気遣って尋ねた。

「美子さん、元気そうだけど、体調のほうはどう？」
「元気、元気。前と比べたら、上り坂を歩くと、すぐ息切れがしてしんどいけど、平らな道なら、いくらでも歩けるよ」
「よかった。癌治療は製薬会社にとっても大きなマーケットだということもあって、研究は日々進んでるよね」
原因も治療法も分からない難病で苦しむ人を身近に見てきた美子は言う。
「入院して検査漬けの毎日を送っても、結局、現われている症状を和らげる治療しかないこともあるものね。癌はありふれた病気だから、治療法は一応あるわね」
「どうして、癌はこんなに増えてきてるのかな？」
洋子が疑問を口にすると、里村がひと言で答えた。
「人間が長生きしすぎるからさ」
「老化が原因なの？」
洋子が尋ねた。
「うん、老化が一番大きな原因だと思うよ。細胞が古くなってＤＮＡが傷つくと、分裂の際コピーミスが生じるから、遺伝子に突然変異が起こる。この突然変異が癌遺伝子や癌抑制遺伝子に起こると、細胞分裂が抑えられなくなるから、死ぬまで増殖することになる。年を取ると、癌細胞を攻撃する免疫力が落ちてくるしね。免疫の網をかいくぐって生き残った一つの癌細胞が二倍、四倍、八倍と分裂を重ね、百万集まって、やっと一ミリくらいの大きさになるそうだ。だから、検査で見つかるまで育つには通常十年から二十年かかるらしいよ」
「じゃ、わたしのも十年以上前から徐々に増えてきたのかな」
美子は納得できないような表情で言った。
「そういうことになるね」
「去年の肺炎で開いた穴を埋めるために正常細胞が異常増殖したと思ってたんだけど」
「うーん、癌を引き起こす原因は老化が大きいけど、それだけじゃないからな。美子さんはまだ若いしな。例えば、ワラビのような発癌性物質を含む食材やダイオキシンのような化学物質も癌を引き起こす外的要因の一つだよね」
「心的なものとしてストレスとかもよく言われてるよね」
耕介も癌の原因に興味がある。
「いろいろな原因があるんだろうな。一つの原因じゃなく複合的なものもね。でもさ、ストレスとか体質とか、とてもあいまいだよね。オレはなんかもっと分かりやすい明確な要因があるように思うんだ」
里村は考え込む。

「測定できたり、目で見ることができるって意味？」
洋子も関心を示す。
「そう。昔イタリアのシモンチーニという医師はカビのカンジダが原因だと言ったんだ。免疫系が弱体化したとき、カンジダは増殖し、コロニーを作る。そのカンジダが臓器に広がったとき、体の免疫系がそれを防ぐため増殖する。それが癌なのだと。だから、カンジダ菌をやっつけるべきだと主張したんだ」
耕介が尋ねる。
「カンジダ菌ってどこにでもある菌だよね。口の中にも存在するんだろ？」
「そうだよ。それから、彼はこうも言った。癌に対し、抗癌剤のような劇薬を投与し、正常細胞や人体を殺すことで莫大な利益を得ている大手製薬会社と政府は、癌を治そうと思っているのじゃなくて、人口削減の方法として癌と癌の薬を利用しているってね」
美子は驚いて声を荒げた。
「えっ？　そんなことありえるの？　医療に携わる研究者は皆、癌を克服しようと新薬を開発してるんじゃないの？」
「分からない。シモンチーニはそう言った」
美子は背筋が寒くなった。
「人間って、そこまで邪悪になれるとは思えないんだけど」
里村はうなずきながら、シモンチーニについて続けた。
「そう信じたいよね。シモンチーニは抗癌剤はカンジダを抑制する免疫細胞も殺してしまうし、抗癌剤を打っても、カンジダはまだ生きていて転移すると言っている。そして、カンジダには重炭酸ナトリウムが効くことを突き止めたのだけど、イタリア政府は彼の文書を無視した。彼は医療組合から除名され、マスコミの餌食になり、最後には投獄されてしまった。多くの医師に支持されていたようだけどね。癌で死んだ患者の体を解剖したら、体内がカビだらけのことがよくあったんだって」
耕介が身を乗り出すようにして言った。
「ボク、そんな説、聞いたことないけど、なんとなく理にかなってるような気がする。抗癌剤については日本の医師の中にも否定的な意見の人はいるよね。製薬会社と医療機関の癒着に言及してたな」
「ああ、K先生だろ。その先生ならたくさん本も出してるよね。興味があったら、美子さんも読んでみたらどうかな」
「そうするわ」
「無理は禁物だから、体の出すサインに逆らわないでね。でも、仕事はできるだけ続けてくださいね」
里村が腰を浮かせたので、耕介が礼を言った。
「いつも生物部の企画に参加してくれて感謝してるよ。専門的な話

にはみんな食いつくからね」
「前から言ってるように、理科好きの子を増やしたいんだ。また何かあったら教えてね」
「わかった。ありがとう」
里村と洋子は肩をならべて帰って行った。
秋も深まる頃、美子はなぜかくしゃみが頻繁に出た。鼻にも違和感があって、鼻水が薄い紫色を呈しているのが気になったが、二週間ほどしたら、くしゃみも収まり、いつのまにか鼻のムズムズ感もなくなると、妙な色の鼻水のことは忘れてしまった。

十一、再発

年末年始は従来通り家族そろっての静かな休日となった。大晦日の夜は皆で紅白歌合戦を見ることになった。耕介はみかんの皮をむきながら美子に話しかける。
「テレビで歌番組を見る機会、減ったよね」
「そうね。昔は毎日のように歌番組、やってたね。久し振りに落ち着いて聞いてみると、やっぱり演歌の人、歌うまいよね。でも、なんでどれ聞いても同じ感じなんかな？　『天城越え』とか『夜桜お七』みたいなかっこいい演歌、少ないよね」
「ワンパターンなコード進行で、年配の人にも歌いやすいんじゃないかな。カラオケ楽しむお年寄り多いだろ」
子どもたちは演歌コーナーになると、風呂に入ったり、メイルしたり、逆に、美子と耕介は、テクノチックな曲や、やたら人数の多い女の子グループが出てくると風呂に逃げた。
年が明けると、白味噌に丸餅の京風雑煮を食べ、松蔭神社にお参りに行った。おみくじを引くと、美子のは「凶」が出たので、祈祷済みの箸をプレゼントされた。ラッキーなのかアンラッキーなのか泣き笑いの美子に、
「希少価値あるよ。お母さん」とか
「今がどん底ということは、これからはいいことしか起らないってことだよ」
子どもたちは口々になぐさめてくれたが、美子は「凶」のおみくじを境内の枝に結びつけ、ため息をついた。
五月に美子はまた定期健診のため日赤に行った。ＣＴを撮ると、右肺縦隔門にリンパ節腫が認められたので、ＰＥＴで全身調べた。すると、両側の肺門から縦隔、腹部リンパ節に集積があるという。杉本先生はコンピュ―タにＰＥＴの画像を映しながら、静かに告げた。
「肺癌の再発だと思います。また化学療法を行うことになります。今回は分子標的剤も併用しようと思います。分子標的剤は癌細胞に

だけ働きかけるので、副作用はほとんどありません。分子標的剤のアバスチンと抗癌剤のパクリタキセルとパラプラチン、この三つの薬剤の点滴を三クールしましょう。沢井さんはまだ若いし、元気だから、がんばってください」

家に帰ってきた耕介が、ボーッとしている美子を見て、聞いた。

「大丈夫か？　病院で何か言われたのか？」

「うん、癌の再発だって。覚悟はずっとしてたけど、ひょっとしたら治ったのかもしれないって心のどこかで期待してたから、現実に引き戻された感じかな。はじめからリンパ節に転移があったんだから、再発は避けられないのにね」

「また抗癌剤の点滴、するのか？」

「そう。今度は分子標的剤も使うって。シスプラチンのような激しい副作用ないらしいから、入院しないで、外来でやるわ」

「そうか。また始まるんか」

外来の集中点滴室には角度調節ができるイスが七つとベッドが十五ほど並んでいる。採血で異常がなければ、医師に針を入れてもらってから、この部屋に来て、三十分から六、七時間かけて点滴を打つ。たいていは抗癌剤の点滴で、たまにベッドもイスも塞がっている場合がある。毎日たくさんの人が化学療法を行っているのだ。年配の男性には奥さんが付き添っていることが多い。奥さんは何時間もベッド脇のイスに座って、じっとご主人を見守りながら、点滴が終わるのを待っている。その忍耐強さには恐れ入る。

今回の点滴では、前のときと同様に、食べ物の嗜好が変わり、食欲のコントロールが難しかったが、吐き気はそれほど深刻な状態にはならなかった。しかし、ひどい脱毛症状が表れて、美子を悩ました。点滴の後三週目から四週目になると、髪の毛が抜け始め、手で触れるだけでパラパラ落ちるようになった。髪を洗うと、体中に髪の毛が張り付き、頭を拭いたタオルは毛だらけになった。体を動かすたびに抜け落ちるので、イラついてカーペット用のコロコロローラーを頭に当てると、おもしろいほど毛が取れた。意地になってやり続け、鏡を見たら、まだらに禿げた恐ろしい自分がいた。情けなかった。家では帽子を被ればいいが、仕事にいかなければならないので、慌ててカツラを買いに走った。

デパートの中に入っているカツラメーカー直営の店で進められるままにセミロングの柔らかいパーマのかかったカツラをつけてみた。耕介も店のおじさんも、カツラを被った美子の姿を見るなり笑い出した。

「ちょっと、そんなに笑わなくてもいいんじゃない？」

美子自身も笑いをかみ殺しつつ言った。耕介は涙目で解説する。

「だって、吉本新喜劇に出てくるカツラ被ったおばちゃんみたいだ

よ」
「なるほどってか、こんなの嫌だわ」
美子はカツラを脱ぎながら、値段を見た。二十万円もする。店のおじさんに「すみません、これは、ちょっと」と謝って、急いで店を後にした。美子はカツラの値段に驚きを隠せない。
「カツラって、ピン、キリだね。ネットで見たのは五千円から二万円くらいだったけど、あの店には二十万から三十万のしかなかったよ」
「あんまり安いのは人工毛でおもちゃみたいだから、ちょっと高くても、少しまともなのにしたほうがいいよ」という耕介のアドバイスを受けて、
「そうね。五万円くらいの探すわ」
美子は、病院に置かれていたパンフレットの中で予算に合うカツラを扱っている店を見つけて、出かけて行った。
一見普通の美容室だが、奥まった部屋はカーテンでプライバシーが守られるスペースになっていた。そこで、何個が試着して、気に入ったものを注文した。それが店に届くのを待って、頭に装着して、顔の形に合うようにカットしてもらった。ただ、このカツラが蒸れて暑くて痒くて不快極まりない。男性の中には四六時中カツラを被っている人も多いと聞くが、美子には耐えられなかった。家に入るなり、カツラを脱ぎ捨てて、開放感を味わった。
カツラも手に入れたので、美子は中途半端にまだらに残った髪の毛を耕介に剃ってもらった。ツルツルしていて気持ちがいいし、美しいと思った。子どもたちはツルツル頭に触りたがり、撫で回したり、ペタペタ叩いたりした。
「ウホホ―ッ！　気持ちいい」
「しっかり化粧して、おしゃれしたら、みんな、ファッションで毛を剃ってると思うかも」
などと好き勝手なことを言う。温泉などに行くと、人前にツルツル頭を曝さざるを得ないから、はじめは勇気が要ったが、人の目にもだんだん慣れてきた。
職場に初めてはカツラをつけていった日、
「いつものショートより女らしくて可愛いよ」
「カツラだって全然分からないわ」
同僚たちは気遣ってくれたが、生徒は胡散臭そうに観察する。
「どうしたん、先生？」
「イメージチェンジよ。ウィッグで遊ぶ時代だよ」
苦しい言い訳を放ちつつ、普段どおり授業を進めた。

十二、癌マーカー

アバスチンとパクリタキセルとパラプラチンの点滴治療は最初のうちは効果があったようで、腫瘍マーカーは七から三に下がった。しかし、治療をやめると、マーカーの値はすぐに上昇し始めた。それで、もう一度同じ組合せで抗癌治療したのだが、今度は上昇を止めることができなかった。上昇の原因を探るため、胸部ＣＴ造影検査、胃と大腸の内視鏡検査、頭部ＭＲＩ、骨シンチを三ヶ月かけて行ったが、癌らしきものは発見できなかった。その間もマーカーは上がり続け、年明けには十を超し、二月には三十になった。

杉本先生は検査結果を前に首をかしげた。

「うーん、おかしいですね。とても悩ましい状況ですね。まあ検査で癌が見つからなくても、マーカーが上がることはよくあるんですが」

「どんなとき、そんなことが起るんですか」

「髄膜や胸膜に癌細胞が散らばっている場合とか、肺の中に微小に転移がある場合ですね」

「症状に表れないんですか」

「ひどくなってくると、胸に水がたまったり、運動能力が失われて、寝たきりになったり」

「寝たきりですか」

「それで、運動能力に支障が出る前に打つ手として、タルセバという飲む抗癌剤を使いたいと思うのですが・・・。タルセバの主な副作用は皮膚疾患なんです。特に顔面ににきび状の湿疹がたくさん現われるようで、口内炎も起こすことも考えられます」

「わたし、皮膚が弱いから心配です」

「症状にあわせて、塗り薬も出していきますよ。ただ、タルセバが効くかどうかは分かりません」

美子は、頭ははげて、顔はブツブツじゃ、もう女も終わりかなという感じがするので、気が進まなかったが、寝たきりになってしまうのは避けたかったので、自分を励まし、新しい治療に臨んだ。服用し始めて一週間ほど経つと、鼻の周りにブツブツができ、次第に口元にも広がってきた。痛くもかゆくもないのだが、知らないうちに出血していることもあった。しかし、思ったほどひどくならなかった。一ヶ月経った時点でマーカーを測ったところ、残念なことに下がるどころか、五十を超していた。覚悟して飲んだのにと、美子はがっかりした。不安になった美子は杉本先生に尋ねた。

「癌マーカーって一体どこまで大きい数値になるんですか」

「上限はありません」

つれない返答に気落ちする美子に向かって、さらに続ける。

「それで、今までに使ったことのない抗癌剤を試そうと思うのです

が。沢井さんは分子標的剤のＡＬＫは使えないので・・・」
「効くかどうか分からないけど、副作用は確実にあるってやつを試していくんですか」
「まあ、そうなりますね」
「先生、最近週刊誌や新書で、抗癌剤は百害あって一利なし。打つべきではない。抗癌剤治療はクオリティーオブライフを低下させるだけだと断言している放射線科の医師がいますよね」
「そういう人もいます」
「先生、もし先生がわたしと同じような状況になったら、抗癌剤治療をしますか」
「最初に癌が見つかったら、癌の治療基準にのっとった治療は受けると思いますよ。でも、再発したあとはどうするか分かりません。わたしはどうでもいいんです」
「自分のことはどうでもいいんですか。マーカーが上昇し続けて、寝たきりになっても？」
「そのときは、静かに・・・」
「えっ？　先生は・・・」
「いえ、待ってください。やっぱり化学治療うけるかもしれません。いえ、受けます」
「先生、正直すぎますよ・・・。これから使うとしたら、どんな薬ですか」
「ドセタキセルという抗癌剤を使うことが多いですね」
「少し考えさせてください」
「わかりました」
家に帰って、耕介に病院でのやりとりを伝え、これからの治療について二人で考えた。美子は自分の思いを語った。
「効くかどうか分からない、というより、効く可能性の薄い抗癌剤を試していくってどうなのかな。そもそも『効く』ってどういうことだろう。マーカーの値が下がるってこと？　普通『効く』っていったら、体の悪い状態がよくなるってことでしょ。わたしはマーカーが高くても、何もしないほうが元気なのよ」
すると、耕介がなだめるように言った。
「マーカーを測るってのは癌が出す物質を測ってるんだろ。その値が上昇するってことは癌がどっかにあって、増えてるんだよ。それを抗癌剤で低くすることによって癌を減少させることになるんじゃない？」
「でもね。癌治療で有名なＫ先生もＮ先生も縦隔リンパ節に癌が存在していたってことは、もうすでにあちこちに転移してるってことで、手術も化学療法も意味がないって言ってるよ。今元気なら、すぐどうこうなることはないけど、近いうちに必ず死を迎えるって。

K先生は抗癌剤を打ったほうが苦しい最期を迎えることになるとまで言ってる。それに、最初臓器に癌が見つかった段階で完璧にやっつけておくことが重要で、もし転移したら、もう打つ手がないみたい。あきらめて、ゆっくり過ごしなさいって」

「ボクとしたら、あきらめないで、まだ使える薬があるなら、それを使って癌を減らして、なるべく長く生きて欲しい。もちろん生活の質も大切だけどね」

「あきらめるっていっても、よりよく生きることを捨てるとか自暴自棄になるという意味じゃないのよ。自分の体をこれ以上強い薬で痛めつけるのをやめて、自然に任せるみたいな。分かってもらえないかもしれないな…。まあ耕介がそういうなら、もう一回、試してみるけど」

「そうか」

耕介は安堵したようだった。

「それからね、塾は三月いっぱいでやめようと思うの。はっきりした治療方針も立たないから、これからどんな検査や治療をしていくかも、どんな副作用がでるかも分からない。ほかの先生や教務、生徒にも迷惑かけるのは目に見えてるからね」

「美子の思うようにすればいいよ。仕事をやめて、好きなことをして、ストレスのない生活をするよう心掛けてみたらいいよ」

「そうする。子どもたちとももっとゆとりを持って接していけると思うしね」

「そうだよ。何か楽しみ、見つかるよ」

美子は仕事をやめた。何かスーッと肩の力が抜けた。「教える」仕事は難しいけれど、おもしろい仕事だ。人間と関わっていけるし、その成長を目の当たりにすることができる。そんな仕事に携われたことを幸せに思う。校責に返り咲いた上野先生は

「病気が治って、また教えたいと思ったら、いつでも連絡してください。待ってますから」と温かい言葉をかけてくれた。「ジーニアス」駅前校は母体の健康なパワーが、害を及ぼす外的異分子を駆逐したようだ。

時間の出来た美子は結婚前にかじった油絵をもう一度やってみることにした。奇をてらうことなく自然や人物をありのままに描きたかった。身の回りに生きている花や動物や人の形はそれだけで、すばらしくデザインされていると思う。その形をつかみ、その色が出せればすごいことだ。小さなものを観察し、描くことは自然の持つ美しさを愛でることになる。耕介や子どもたちも描きたい。各々を見つめる時間は、その人物を思う時間なのだと思う。

美子は自分の気持ちを整理したうえで、杉本先生の勧めるドセタキセルを打つことにした。脱毛や悪心など普通に副作用はあった。

三回打ったところでマーカーを測ってみたところ、やはり減少していなかった。杉本先生は血液検査の数値を見ながら
「効いていませんね。まだ使っていない抗癌剤を一つ一つ試しますか」
「なんとなく効く気がしません。副作用は確実にあるから、点滴したらやっぱりしんどいし、一ヶ月ほど何もしないで様子を見てもいいですか」
「そうですね。じゃ、また九月の初めに来てもらって、ＣＴとマーカー、測りましょうか」
「そうですね。それで、何か明らかに異常があれば、対処してもらって。何も異常なかったら、どうしようかな。また、その時考えます。それと、先生、これリビングウィルです。お渡ししておきます」
「分かりました」
先生は神妙な面持ちで美子の手紙を受け取った。リビングウイルには一切の延命治療を拒否する旨を記した。自分の肺で呼吸ができなくなったり、自分の口から食べ物が摂れなくなったり、自分の心臓が血液を送れなかったりして、回復の見込みのない場合は、痛みを取り除く処置だけはしてもらって、早く逝かせてくれるように頼んだ手紙だ。家族に最期の決断を委ねるのは残酷なことだから、自分の意識がはっきりしているうちに、自分の意志を残しておいたほうがいいと考えたのだ。

十三、里村の訪問

大学が夏休みに入ると、里村が沢井家を訪れた。開口一番
「癌マーカーが上昇し続けてるって聞いたけど」
「ＣＥＡが五以下が正常値のところ、百以上あるのよ。抗癌剤やっても全然下がらないで上がり続けるから、症状は出てないけど、気持ち悪いのよ」
「腫瘍マーカーっていろいろな種類があるよね。ＰＳＡというマーカーは前立腺癌にだけ高い値を示すから臓器特異性があるけど、ＣＥＡは大腸癌、乳癌、胃癌、すい臓癌などいろいろな癌で値が高くなって臓器特異性は低いからな。ほかの臓器、大丈夫？」
「ペットで体全体調べたし、胃も大腸も脳も骨もみんな検査したけど異常ないのよ」
「おかしいね。主治医は何て？」
「先生もよく分からないみたい。ＣＴやＭＲＩで何もみつからなくても、マーカーが上がることって割とあるらしい。主な抗癌剤はもう試したと思う。初め効いてても、次にやったら効かないこともあるし」

「癌の病原体はインフルエンザウィルスみたいに薬に対して耐性を持つ形に変身していくようだからね。たちが悪い。分子標的剤はやったの？」

「アバスチンは抗癌剤と抱き合わせで使った。何かと問題になっているイレッサは先生に言わせると目の敵にされるような悪い薬じゃないそうだけど、わたしの癌には合わないらしいし、最新のアルクも調べてもらったけど、わたしの癌には効かないみたい」

「打つ手なしって感じだね」

里村も考え込んでしまった。

美子も口を開く。

「何度も言うようだけど、わたしの場合、肺にできた穴にカビのような異物が入り込んできて、それをやっつけようとして正常細胞が癌化したと考えてるんだけど」

里村が考え考え、答えを探す。

「アスペルギルスというカビ菌？　でも、それだったら、レントゲンやＣＴで異常が見つかるはずだけどね。肺が白く映るみたいだよ」

「そうよね」

里村がスマートフォンでアスペルギルスを検索した。

「アスペルギルスが関与する病気には二種類あるようだ。肺アスペルギローマという病気は前からあって今は活動していない肺結核や肺のう胞などの古い空洞性の病変に吸い込まれたアスペルギルス属の胞子が空洞で増殖して菌球をつくる病気らしい。もう一つのＩＰＡ侵襲性肺アスペルギルスは、血液中に悪性腫瘍を持つ患者の抗癌化学療法によって好中菌が減少したときにアスペルギルス属の菌糸が血管内に侵入し、他の諸臓器のいろいろなところに病変をつくる病気だそうだ。うーん、美子さんの病気は肺の穴からすべてが始まったんだから、このアスペルギルス菌、あるいは、それに類似したカビ菌が関わっているような気がするよね」

「手術でピンポン玉くらいの癌をとった時に、きちんと切り開いて見たら、中からカビ菌が出てきたかもしれない。カビの菌球が癌細胞に覆われているのが見られた可能性も無きにしも非ずね。残念！」

悔しがる美子は急に咳き込んだ。ゴホゴホと嫌な音を立てて激しく咳くので、耕介は思わず背中をさすった。咳が収まると、大きなクシャミをひとつした。苦しそうに顔を上げた美子の右の鼻の穴から濃い紫色の鼻汁が一本ツーッと流れ落ちた。

「紫色の鼻汁？」

三人とも目を疑った。

「これ、サンプルにもらって帰るよ。大学で調べてみるよ。何か入れ物、ない？」

里村は耕介の持ってきた容器にサンプルをとりながら、ためらい

がちに耕介のほうを向いていった。
「耕介、美子さんがクシャミをしたとき、何か紫っぽい靄みたいなものが一瞬見えなかったか？」
「ボクは気がつかなかった」
「そうか。ならいいが。なるべく早く結果を報告しに来るよ」
里村は言い残して帰っていった。美子は不安を隠せない。
「わたしの体の中で異常なことが確実に起りつつあるよね」

十四、油絵

この夏、美子は大きな油絵を描いていた。ＤＮＡをイメージしたパステルカラーのらせん模様をバックにして、耕介と美子を中心に美子の母と春子と夏生を描いたものだ。綿々と引き継がれていく遺伝子、つまり、生命のリングを表現しようとした。百号のキャンバスに絵を描くのは大変だ。まず、キャンバスを画材店で買い、もって帰ってくるのが一苦労だ。車に入らず、車の屋根にくくりつけて、落ちないかとハラハラしながら運んだ。百号を置いて描くスペースも必要になり、二階の夫婦の寝室の一角は急遽アトリエになってしまい、油絵の具と溶き油の匂いが立ち込める部屋と化した。大量の絵の具を投入して八割方出来上がった絵を見て、
「これ、わたし？　ちょっと漫画っぽくない？」
「ボクの右手、短すぎるし、足の角度も不自然だよ」
「お父さん、そっくりだけど、お母さんの顔、サルみたい」
とか子どもたちはいろいろ言いたい放題。
美子は自分の顔にてこずっていた。きれいに描きたいという邪念が入るせいか、描けば描くほど妙な顔になってしまう。肌色をだすのにも苦労した。ルノアールのような透明感のある温かい肌色は出せない。西洋人と日本人の肌色は違うから仕方ないさと言い訳してみる。
それに、最近色がつかみにくい。白の絵の具をパレットに出すと薄紫色に感じるし、黄色や緑色もなんだか茶色がまじっているような気がする。だから、すべての色を置いて眺めると、白の持つ清潔さや黄色の持つ快活さ、緑の持つみずみずしさに欠ける絵になっていて、美子のイメージする色調にはなかなかならない。
思うように描けないもどかしさを感じつつも、絵の世界に遊ぶ時間は楽しい。描いていると、子どもたちの幼い頃の姿が浮かんできた。春子は女の子のくせに生傷が絶えなかった。前島病院で切り傷を縫ってもらったり、骨折した腕にギブスをはめてもらったりしたものだ。小学生の頃は短髪で短パンで男の子みたいだったのに、今は日焼け止めを塗って、制服のスカートを短めにして通学している。

夏生は色が白くて泣き虫で、一歳の頃は足にまとわりついて離れなかったのに、幼稚園に行くようになると、ひょうきん者になって皆をよく笑わせていた。今はそうでもないけれど、男の子にしたらおしゃべりなほうだと思う。同い年の夫、耕介はいつだって美子の強い味方だった。美子のヒステリーや苛立ちにも大人の対応をしてくれたし、忙しい中家事や育児も助けてくれた。本当によい伴侶に巡り合えたものだと思う。

普段は自分の力ではどうにもならないことについては、考えたり悩んだりするのは避けている美子だが、子どもたちが将来どんな大人になって、どんな人と結婚するのか見ることができないのだと気付き、寂しくなった。

「おセンチすぎるぞ、わたし」

自分を叱り、絵筆を動かす。

「わたしはわたしのＤＮＡをしっかり残すことが出来たんだ」

美子は顔を上げた。

十五、墓参り

お盆に家族みんなで耕介の両親の墓参りに行った。

耕介の父は六十三歳で他界した。年金が全額もらえる年までもう少しだと言っていたのに、それを待たずに逝ってしまった。腰痛を訴えたので、病院に行ったら、胃に癌が見つかった。その癌が骨に転移して痛みを引き起こしていたのだ。子どもたちのたっての希望で開腹手術をしてもらったが、開けてみて、癌がかなりあちらこちらに浸潤していたので、何もせず腹を閉じた。一時は回復したように見えたが、結局下血がひどくなり、大量の輸血をしたが、だめだった。今でこそ癌告知はまず本人にされるが、当時は親族にだけ告げられ、本人には知らされないケースがかなりあった。癌の宣告イコール死の宣告のようなところがあったからだと思うが、美子は病名を秘密にされたり、治療法も選べないなんて、なんと理不尽な状況だったのだろうと、義父に対して同情を禁じえなかった。身内は、手術や輸血が患者にとって苦しみを増すだけかもしれないとは考えづらいものなのだろう。

耕介の母親の場合も、白内障の手術を受けたとき行った血液検査で腫瘍マーカーが異常に高かったことから、肺癌が見つかった。もう手の施しようがない段階だった。それで、手術をせずに化学療法を受けたのだが、昔はまだ副作用を抑えるいい薬もなかったので、すさまじい吐き気に襲われ、食べ物は喉を通らず、見る見るうちに衰弱していった。今なら高齢で体力もなく末期癌の場合は強い抗癌剤を使うことを躊躇すると思うのだが、本人の了解もなく治療は進

められた。
子どもたちは親にはできるだけ長生きしてほしいものだし、それを非難することはできないが、患者本人の苦しみを思うと辛い。子どもたちのために苦しい治療に耐えたのだろう。そのとき美子は嫁という立場だし、癌について何も知らなかったから、そばで見るしかなかったが、自分も同じ病を得て、やっと義父母の気持ちや苦痛が分かったような気がした。

十六、里村の報告

八月も後僅かになり、酷暑もやっと峠を越したような早朝、里村が耕介の携帯に電話をかけてきた。
「美子さんのサンプルから妙なものが見つかったんだ。大学のほうに検査結果の詳細や資料があるから、こっちに来られないか？」
「きょうは生憎学校の用事が入ってしまってるから、あした午前中に行くよ。大丈夫か？」
「ああ、待ってるよ」
耕介は里村の言った妙なものが気にかかったが、きょうの十時から生物科の教師の会議が予定されていたので、抜けるわけにはいかなかったのだ。新学期の授業の進度や実験やフィールドワークの内容と回数、クラブで取り上げるテーマなど話し合い、ある程度具体的に詰めておく必要があった。会議には洋子も出席していた。会議が終了し、解散した後で、耕介のところにやってきて、心配そうに尋ねた。
「奥さん、体の調子はいかがですか」
「元気にしてるよ。油絵描いたり、ウォーキングしたり。八月は病院にも行っていないようだよ」
「そうですか。里村先生も心配していました」
「まあ、数値的にはどうなのか分からないけど、見た目は普通に元気だよ。里村とはうまくいってるの？」
「はい。透さんは優しいし、おもしろいし」
「また一緒に遊びに来てくださいね」
耕介はそう言って洋子と別れた。

次の日、耕介は美子とともに里村のいる大阪の大学に向かった。里村は生物研の微生物専門の三田教授のもとでカビについて研究している。学生の指導も任されているらしい。研究棟の二階にある里村のネームプレートが掲げられた部屋をノックすると、里村が飛んできた。
「きょうは三田先生も学生もいないんだ。オレだけだから、気使わ

なくていいよ」
美子は手土産にもってきた焼き菓子を差し出した。
「そうなの。また学生たちが来たら、いっしょに食べてね」
「ありがとう。飢える学生たちに施そう」
と言いながら、土産の箱を無造作に机の上に置くと、里村は早速二人にコンピュ―タの画面を見せた。そこには薄紫色の小さい丸い玉がたくさん見えた。玉からは細い繊維みたいなものが四方八方に広がっていた。
「今見えているのは美子さんのサンプルだ。それから、今度はこっちのを見てくれ」
一瞬で画面が入れ替わった。さっきのとよく似た細かい丸い玉とそこからあちこちに出ている繊維上のものが映しだされていたが、こっちのほうが丸い玉が大きく、その輪郭もはっきりしていて、繊維状のものも太いような気がした。色もどちらかといえば、青っぽい。
「よく似てるだろ。後で見せたのはヒストプラズマ・カプスラートゥムという真菌なんだ。鳥やコウモリのねぐらの真下の土壌によく見られるらしい。鳥やコウモリの糞便の中で菌糸を伸ばして増えるようだ」
「コウモリ・・・。コウモリの糞か。どっかでひどい匂いを嗅いだ記憶があるよ。えーっと」
耕介が首をひねっていると、美子が大きな声で言った。
「タイのピーピー島よ。ウミツバメが巣をつくる島に行ったとき、コウモリがいたわ。わたしが尻餅ついて、コウモリの糞が手についてて・・・」
それを聞いて、納得した様子の里村が続ける。
「その時、胞子か何か吸い込んだのかな。ただ、このカビを人が吸い込んでも、無症状の場合が多くて、百例に一例ほど発症しても、咳や関節痛、胸痛を伴う急性の熱性疾患の場合は治療は必要ないと記述されてるんだ。しかし、現地で実際どのくらいの人が、このカビを体に取り込み、どんな症状が出ているのか、この短い文章からは見えてこない。それに、美子さんのはこのヒストプラズマ・カプスラートゥムと少し異なっている。サイズが三分の一くらいだし、紫色も鮮明だし」
「また違うものなのか」
「分からない。オレが持ってるデータの中では美子さんのサンプルはヒストプラズマ・カプスラートゥムと一番似てるんだ。それがなんらかの理由で変形したのかもしれない。でも、確かめるためには、二つを同じ条件で培養し、どう成長していくか、つまり、菌糸を伸ばし胞子を作るのか、あるいは、酵母のように分裂して単細胞の形

で増えるのかとか比べないとな」
「でも、ヒストなんとかっていうカビは手に入るのか」
「そのカビは特別な地域の限定された場所にしか生息しないみたいだから、教授に頼んで、そのカビを持っている大学に依頼して、サンプルを送ってもらうか、オレがその大学に出向くかになると思うけど、今すぐ答えは出ないよね」
「でも、似てるんだったら、同じような生態を示すんじゃないのか。そのカビをやっつける薬は？」
「通常治療の必要はないと考えられているからか、薬については何も記されていない。オレは現地でも実体がつかめていないんじゃないかと思うんだ。カビを吸い込んだ直後は風邪引き程度の症状で収まってしまうが、本当はこのカビが長い時間をかけて、人の体を蝕んでいるのかもしれない。普通癌で死んだら、解剖なんかしないで、埋葬してしまうから、見つかっていないだけだとも考えられるし」
「いずれにしても、今のところ対処のしようがないね」
「そうなるね。でも、美子さんのサンプルはあるんだから、薬は作れるんじゃないか」
「うーん、間に合うのかな。それに、カビを殺せても、癌細胞の暴走は止まるんだろうか」
「分からない、残念だけど」
耕介も里村も黙ってしまった。美子だけ里村の話をおもしろがった。
「あのコウモリの糞が原因だと考えると辻褄が合うわ。あのタイ旅行でコウモリカビを吸い込んだとき、たまたまわたしの肺には穴があったので、その穴にカビが入ってしまった。そこでカビは分裂を繰り返し増えてきたので、体細胞がやっつけなくちゃとカビを覆うように大増殖して、あろうことか癌になってしまった。手術でピンポン玉大の癌の固まりは除去されたが、そのときすでにカビはリンパや血液中に飛び出して、その流れに乗ってあちらこちらに広がり、もしかしたら菌糸を伸ばしていったのかもしれない」
「普通人の体の中で菌糸は作らないみたいだよ」
と里村が言っても、美子は強気だ。
「でも、分からないんでしょ。人体に入って、増殖しやすいように形や性質を変えたのかもしれないわ。それに、わたし、色の感覚が狂ってきてるのよ。ものを見ることに携わっている器官に異常が起きてると思う。白が薄紫っぽく見えるのよ。　抗癌剤や分子標的剤ではカビは死なないし、人の免疫力が弱くなるから、よけいにカビは増殖しやすくなる。体内で胞子を作って飛ばせることってあるのかな」
里村は答える。

「真菌の多くは水分や栄養分が得られなくなったとき、つまり、生育するのに悪い環境になったとき、菌糸を伸ばすのをやめて、胞子を作って飛ばすんだけど」
「わたしの体の中でカビ菌が増えてるとして、その菌にとって最悪の環境になるのは、わたしが死んだときってことになるのかな。呼吸も血液の循環も止まってしまうんだから」

十七、美子の死

耕介は常々夫婦は寝室を別にしてはいけない、一つのベッドに寝るものだと主張している。美子は、耕介の鼾がうるさくて眠れないときもあるし、ベッドで本を読みたいときもあるので、違う部屋で眠りたいと思うことも多々あるのだが。
ただ、夏は例外のようだ。というのも、耕介はとても暑がりなのだ。熱帯夜はエアコンのある部屋でないと眠れないようだ。一方、美子は寒がりなので、エアコンをつけたまま寝ると、体調が悪くなるから、暑い夜でも扇風機の首を回しながら眠る。というわけで、夏の間は夫婦が別々の部屋で休むことになる。耕介はエアコンのある夏生の部屋に布団を引きずっていって、夏生のベッドの横の床で寝る。夏生は迷惑そうに言う。
「どうしてお父さんがここで寝るの？　お母さんと寝ればいいのに」
「お父さんはエアコンの中で寝ないと、ぐっすり眠れなくて仕事にも差し支えるんだ。あんな暑いところで眠れるほうがおかしいんだ」
「仕方ないなあ、もう」

夏休みも残すところあと三日という熱帯夜、さすがの美子も寝苦しくて夜中に目を覚ましてしまい、扇風機の風力を弱から強に切り替えた。蒸し暑くて、息苦しいと思いながら、横になっていたのだが、突然呼吸ができなくなった。必死に息を吸おうとするのだが、口がパクパク動くだけで、空気は少しも入って来ない。声を出すこともできず、胸をつかみながら身をよじる。エビのように体を丸め、
「わたし、死ぬんだな」とはっきりと感じた瞬間、意識が薄れていった。
朝、耕介は寝坊してしまった。いつもは美子が一階から「耕介！」と呼ぶ声に起こされるのだが、今朝は美子の声がしなかったのだ。妙な胸騒ぎがして、隣の美子が寝ている部屋を覗いた。美子はベッドの端っこで丸くなっていた。眠っているのかと思いたかったが、何か不自然な気がした。
耕介は「美子！」と呼びながら、夢中で体をゆすった。何の光も

宿していない瞳が薄く開けられていた。耕介は「美子、美子」と叫び、頬を叩き、体を何度も何度も揺さぶった。男泣きに泣いていると、子どもたちが起きてきて、美子を見て、呆然としている。
「お母さん、死んじゃったの？」
「うそでしょ？」
二人とも信じられない様子で耕介に訴えるような目を向けた。耕介は気を取り直し、涙を拭いて答えた。
「一人で逝ってしまったようだ」
「きのうあんなに元気だったのに。どうして？」
二人は美子の髪や手に触れながら、泣きじゃくる。やがて、泣きつかれて、しばらくボーッと美子の姿を見つめていた。夏生はポツリと言った。
「きのうお母さん、元気に何か怒ってたよね。何に怒ってたっけ？」
春子が答えた。
「ゴキブリに怒ってたよ。目に付く白い壁のところにウロウロ出てくるから殺してしまうのよ、姿を隠して生活してたら、殺さずにすむのにって怒ってた」
「そうだったね。ちょっと変な理屈だよね」
耕介も子どもたちも泣き笑いした。
気を取り直した耕介が告げる。
「さあ、お母さんを旅立たせる準備をしなくちゃな」
耕介はセレモニーホールに葬儀などの依頼の電話をかけるのと同時に、身内と職場、里村に美子の死を伝えた。ホールの係りの人が来て、淡々と葬儀の準備が進められ、その日の夜にはホールで通夜が営まれることになった。セレモニーが始まるまでの間、耕介と子どもたちが棺のそばで美子を見守っていた。
耕介が棺の中を覗くと、美子はお気に入りの青いドレスに身を包み、薄化粧を施されていた。普段めったに塗らないルージュをつけ、頬には優しいコーラルの紅をさしてもらった美子は今にもむっくり起き上がり、「耕介、何してるの？」とでも言い出しそうなくらい、みずみずしかった。
慌てて駆けつけてくれた里村はかける言葉が見つからず、耕介にうなずいてから、子どもたちを静かに抱き締めた。四人は棺を前にポツリポツリと美子の思い出を語り始めた。
「お母さんは生物の先生になろうとしてたんだよ」
耕介が口火を切った。
「えっ？　生物なの？」
子どもたちは驚いた。里村は懐かしそうに耕介に言う。
「おまえたち、教育実習で知り合ったんだよね」
「だけど、学校の先生には向いていないと思ったみたい」

「どうしてだろうな」
「ボクは生物という科目を通じて、いろんな知識を伝えるのも大切だけど、それ以上に、生徒や親と対話して、心に寄り添ってできた信頼感をベースに互いに成長することのほうに重点を置きたいタイプなんだ。美子は、生物なら生物、英語なら英語の学問としてのおもしろさや深さを実感させて、学問そのものに興味を持たせることを目指していたと思う。だから、他の教師との関わりあいとか親との面談とか山ほどある雑用みたいなものにはとらわれたくなかったのかもしれない」
「大学で教えたほうが合っていたのかもね」
「本人は自分の能力の限界を把握してたから、それは不可能だと分かっていたよ」
耕介は寂しそうに微笑んだ。
「塾のほうが教科を教えることに集中できたのかもしれないね」
と里村がつぶやいた。
春子も母親の生き方を振り返る。
「お母さん、よく勉強してたよね。いつも机に向かって何か書いてた。数学のときもあったし、英語のときもあった」
夏生がつぶやいた。
「お母さんのごはん、おいしかった」
耕介は朝からごはんを食べていなかったことを思い出した。
「そういえば、ごはん食べるの忘れてたね。里村は？」
「オレもまだだ。今何時？　えっ！　もう二時まわってるよ。何か食べに行くか？」
「里村、悪いけど、こいつらも一緒に食べに連れて行ってくれないか？　美子ひとりにできないから、ボクはここにいるよ」
「わかった。帰りにコンビニで何か買ってくるよ」
里村は子どもたちを連れて出て行った。耕介は一人残り、美子に語りかける。
「おまえも今頃どっかで自分の体、見てるんだろうな」
耕介は美子がこの部屋にいるような気がした。耕介はしばし美子と二人きりの時間を漂い、生命と増殖について考えをめぐらせる。人間も含めた地球の生き物はすべて地球の生態のルールに則って生きている。何かが何かのエネルギーを摂取して、己の生命を維持したり、己のＤＮＡを複製すべく増殖している。それを弱肉強食とも表現することができる。動植物の世界では寄生して広がる種も多い。国レベルでいうと、強国が弱国を取り込んで、更に大国化するし、大企業は下請けの中小企業を食い物にして成長する。人間レベルで考えると、権力者は弱いものを抱き込んだり、抹殺したりして、より力を持つこともある。

我々人類も地球と言う星に生息するカビのような物だと言えないだろうか。人類の出現と同時に地球の汚染は始まった。わたしたちは生活の維持と繁殖に適した場所に定着し、爆発的に数を増やし、毒を撒き散らしながら、地球の表面を覆いつくすほど増殖してきたのだ。いつか宿主である地球そのものを死に至らしめることになるのだろうか。

美子の肺に飛び込んだカビは当然本能に従って、自分の置かれた場所で、出来る限り自己を増やそうとした。結局、宿主である美子の命さえ奪ってしまうほど多くなってしまった。癌発症は美子の場合、美子自身の肉体を守るための手段だったのかもしれない。生き物らしい死に方だなと耕介は少し羨ましくなる。突発的な事故や犯罪に巻き込まれて、何の心の準備もないまま、命を絶たれることも起こりがちだ。美子は自分の生き方を振り返ったり、自分で最期までの過ごし方を決めることができた。

美子は宗教に関しては懐疑的で、いわゆるリーインカーネイションは信じていなかったが、宇宙のエネルギーの流れとか、自然の法則の存在は信じていた。死んだら人間の肉体は無に帰ってしまうが、体を構成する物質は分解され、微粒子アトムとなり、空中や土中に放たれる。それらがまた地球を形作るものの一部になると信じていた。耕介は暗闇の中で美子の肉体が地球に帰っていく様子をイメージしていた。

二時間ほどして、里村と子どもたちが戻ってきた。二人は里村から耕介の若かりし頃のいろいろな話を聞いてきたのか、「お父さん、サルの生態とか調べてたの？」とか「里村のおじさんと大学に泊り込みで実験してたんだね」とか耕介の学生生活に興味津々だ。耕介は心配になり、

「里村、子どもたちに余計なことしゃべってないだろうな」と里村を睨むと、

「さあね」とはぐらかされてしまった。子どもたちが少し元気になった様子を見て耕介は口には出さないが、里村に感謝した。

通夜には、美子の母親、兄夫婦とその子どもたち、耕介の妹夫婦、それに、美子の同僚や耕介の学校関係の人々が訪れた。美子の若すぎる死にだれもが沈痛な面持ちで臨んでいた。皆が順番に焼香をしていたとき、係りの人が誤って、部屋の電気を消してしまった。「失礼しました」と言って、慌てて電気をつけたのだが、辺りが暗闇に包まれ、棺の周りの明かりだけが点っていた一瞬が生じた。そのときだ。棺の窓、つまり、美子の顔がある部分から、かすかに何かがキラキラ流れ出ていた。他の人は見逃したかもしれないが、耕介と里村の目ははっきりとその現象を捉え、二人は思わず「アッ！」と小さな声を出していた。

弔問客が帰り、親戚の人や子どもたちをホールが用意してくれた休憩室に案内したあと、耕介と里村は棺の部屋に戻って、もう一度部屋の電気を消してみた。すると、棺の周りにだけ祭壇の光が届いて、スポットライトを当てたように明るくなっている。そして、先ほどと同じように棺の窓からホコリのようなものが吐き出されている。よく見ると、美子の少し開いた口と鼻、さらに耳からもホコリがジワジワ流れ出ている。少しずつ部屋全体に胞子が満ちてくる。フワッと吐き出された粒子は美子の体をいとおしむように、しばらく美子のそばを漂って、やがてあたり一面に拡散していく。

「胞子なのか？」独り言のように自問する里村。

「そうだと思う。この前見たキノコの胞子が流れ出る様子と同じだよ」

「やはりカビが美子さんの体を蝕んでいたのだろうか」

「そうだとしか考えられないよ。美子が言っていたように、美子の肉体の死によって、カビにとって劣悪な条件になった今、胞子を作って飛ばしているのだろう」

「この胞子たちは新しい宿主を探しているのだろうか」

「人間の肺に入り込もうとしている？」

二人が話している間も、胞子は静かに流れ続けている。二人は胞子たちがまるで遊んでいるような幻想的な光景に魅了されていた。どのくらい時が過ぎただろうか、ふと我に返った里村はなんだか恐ろしくなって、棺の窓を閉めた。

翌日の昼に、葬儀が行われた。読経を聞いていると、様々な思い出が蘇ると同時に、もう二度と美子と時を共有することはない事実が胸に迫り、耕介は涙を止めることができなかった。子どもたちもまた目を赤くしている。会場のあちらこちらからも啜り泣きが聞こえてきた。出棺まえ、最後のお別れということで、棺の蓋が開けられ、親族や会葬者が棺の周りに集まった。各々手に花を一輪持っている。美子の姿を目に焼き付けておこうと、みんな身を乗り出すようにして、美子を見つめながら花を手向けた。耕介は見えないけれど存在するカビ菌の胞子の姿が頭から離れず、その菌が子どもたちや参列者の体に取り込まれていくのを何とか避けたいと思う気持ちもあったが、今は美子との別れと向き合うべきだという人としてのあり方を重んじた。

里村も菊の花を美子の胸元に置きながら、棺の安置されている部屋を眺めた。そして、美子から出つつあるカビの胞子に思いを馳せた。プーケット島に存在するカビの正体と美子のカビとの関わり、また、そこに住む人々の病気とカビの因果関係を調べるのが、長年身近に美子を見てきた科学者でもある自分の使命だと強く感じていた。それが癌自体の原因究明と治療法の新しい指針になるかもしれ

ない。来年三月にもタイに渡り、腰を落ち着けて、カビの研究に取り組む旨を主任教授に伝えようと決心し、気持ちを引き締めた。

昼間のことで電気も煌々とついていたので、部屋にいる人には見えなかったのだが、棺の蓋を開けた瞬間、棺に溜まっていた無数の胞子が部屋中に飛び散って、部屋は胞子だらけになった。暗闇で光を当てて見たら、さぞ美しい光景が見られたであろう。美子の口や鼻からはまだ胞子が吐き出され続けている。そして、棺の周りの人たちの鼻からも口からも吸い込まれていく。息をするたびに、何か話すたびに、胞子たちはやすやすと人間の呼吸器に到達するだろう。肺に入った胞子はどうなるのだろう。肺に何かトラブルを抱えている人や、加齢やストレスなどで免疫力が落ちている人の肺に定着するかもしれない。そして、美子のように体中に入った異物に対抗するために体細胞が異常増殖するかもしれない。つまり、正常細胞の癌化が起こるおそれがある。癌になってしまった人はこうつぶやくだろう。

「やっぱりオレも癌になったか。うちは癌家系だからな。まあ仕方ないな」

（了）

（参考）
中川恵一『がんのひみつ』朝日出版社、２００７
近藤　誠『医者に殺されない４７の心得』アスコム、２０１２
浜田信夫『人類とカビの歴史』朝日新聞出版、２０１３
船山信次『毒、青酸カリからギンナンまで』ＰＨＰ、２０１２
トニー・ハート著、中込治訳
『恐怖の病原体図鑑』西村書店、２００６